松山市文化財調査報告書146

松山市保健センター南部分室・松山市南部児童センター整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

古　川　遺　跡

－４次調査－

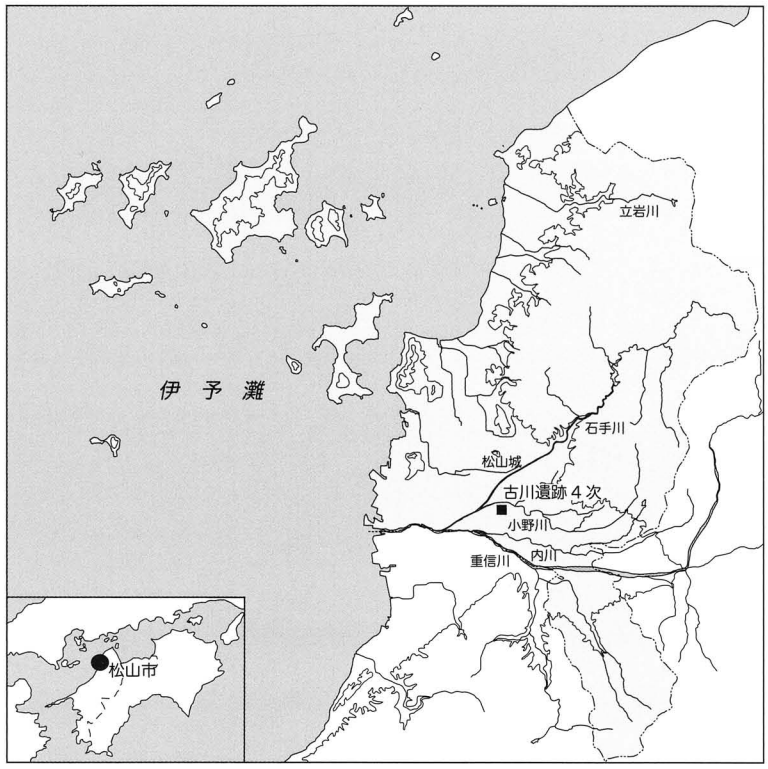
２０１０

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

松山市保健センター南部分室・松山市南部児童センター整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

古　川　遺　跡

－４次調査－



２０１０

松　山　市　教　育　委　員　会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋　蔵　文　化　財　セ　ン　タ　ー

巻頭図版　調査地遠景（西より）

序

本書で報告する古川遺跡４次調査は、公共施設整備に伴う調査です。これまで古川遺跡では、道路関連の整備に伴う発掘調査が行われ、弥生時代から中世の貴重な遺構・遺物が数多く見つかっています。古川遺跡の東側に位置する西石井遺跡でも多くの竪穴住居や溝、井戸などが見つかっており、両遺跡一帯に弥生時代から古墳時代の大きな集落が営まれていたことがわかってきました。今回の調査地は、その集落の南西部に位置しています。

調査では、弥生時代から近世に至る遺構・遺物などが見つかりました。中でも弥生時代後期と古墳時代後期の溝が確認され、古川遺跡周辺の旧地形とかつての土地利用の一端をうかがい知ることができました。

このような成果を得ることができましたのも、調査にご協力いただきました各方面のご理解とご協力の賜であり、心より感謝申し上げます。本書が、埋蔵文化財の調査・研究の一助となり、文化財保護・教育文化の発展に寄与できることを願っております。

平成22年3月31日

財団法人松山市生涯学習振興財団

理事長　　中　村　時　広

例　言

1．本報告書は、松山市古川北三丁目３１８番１の一部において松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが実施した古川遺跡４次調査の発掘調査報告書である。

2．調査は、松山市保健福祉部子育て支援課により計画･実施された「松山市保健センター南部分室･松山市南部児童センター」建設に伴う事前調査として平成21（2009）年３月２日～平成21年５月31日までの間に実施された。

3．本書で使用した標高数値は海抜標高を示し､方位は国土座標第Ⅳ系に基づく座標北（世界測地系）である。

4．遺物の実測・製図、遺構図の製図等は、多知川富美子、木下奈緒美が行った。

5．遺構の撮影は、大西朋子、武正良浩が行い、遺物撮影・写真図版の作成は大西朋子が行った。

6．遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。

7．本書で使用した弥生土器の編年については『弥生土器の様式と編年・四国編』「伊予中部地域」梅木謙一2000を参考にした。

8．遺構は以下の略号で記した。
溝：ＳＤ、自然流路：ＳＲ

9．第３章自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に業務委託した。

10．基準点の配置は国際航業株式会社に業務委託した。

11．本報告にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターに保管されている。

12．本報告の執筆・編集は、武正良浩が行った。浄書は多知川、木下、髙尾久子が行った。

本　文　目　次

第１章　はじめに
１．調査に至る経緯…… 1
２．刊行組織…… 1
３．環境
（１）地理的環境…… 3
（２）歴史的環境…… 3
第２章　調査の概要
１．試掘調査…… 7
２．調査の経過…… 7
３．層位……10
４．遺構と遺物……15
第３章　自然科学分析
はじめに……31
１．試料……31
２．分析方法……31
３．結果……31
４．考察……32
第４章　まとめ……38

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺の遺跡分布図…… 2
第２図　調査地と周辺の遺跡…… 4
第３図　調査区・試掘トレンチ位置図…… 8
第４図　遺構配置図…… 9
第５図　調査区北壁・南壁土層図……12
第６図　調査区東壁土層図……13
第７図　調査区西壁土層図……14
第８図　ＳＲ１測量図……16
第９図　ＳＲ１出土遺物実測図……17
第10図　ＳＤ２測量図……18
第11図　ＳＤ２出土遺物実測図（１）……19
第12図　ＳＤ２出土遺物実測図（２）……20
第13図　ＳＤ３測量図・出土遺物実測図……22
第14図　ＳＤ４測量図……23
第15図　ＳＤ４出土遺物実測図（１）……24
第16図　ＳＤ４出土遺物実測図（２）……25

第17図　トレンチ出土遺物実測図……26
第18図　採集遺物実測図（1）……27
第19図　採集遺物実測図（2）……28
第20図　採集遺物実測図（3）……29
第21図　採集遺物実測図（4）……30

表　目　次

表1　樹種同定結果……31
表2　出土遺物観察表　土製品……39
表3　出土遺物観察表　石製品……42
表4　出土遺物観察表　木材……42

図　版　目　次

巻頭図版　調査地遠景（西より）

図版1　自然科学分析　木材（1）
図版2　自然科学分析　木材（2）
図版3　自然科学分析　木材（3）
図版4　1．調査前風景（南西より）
　　2．調査区南側客土除去状況（北より）
図版5　1．調査区北側遺構検出状況（北より）
　　2．ＳＲ1内遺物出土状況（北西より）
図版6　1．ＳＲ1完掘状況（北より）
　　2．ＳＤ2完掘状況（北東より）
図版7　1．ＳＤ4内遺物出土状況（北西より）
　　2．ＳＤ4内遺物出土状況（北より）
図版8　1．ＳＤ4完掘状況（北西より）
　　2．調査区北側完掘状況（北より）
図版9　1．現地説明会風景（北より）
　　2．現在の状況（南西より）
図版10　①　ＳＲ1出土遺物
　　②　ＳＲ1出土遺物
　　③　ＳＤ2出土遺物
　　④　ＳＤ4出土遺物
　　⑤　客土内採集遺物（管玉）
　　⑥　客土内採集遺物（砥石）
図版11　　客土内採集遺物

第１章　はじめに

１．調査に至る経緯

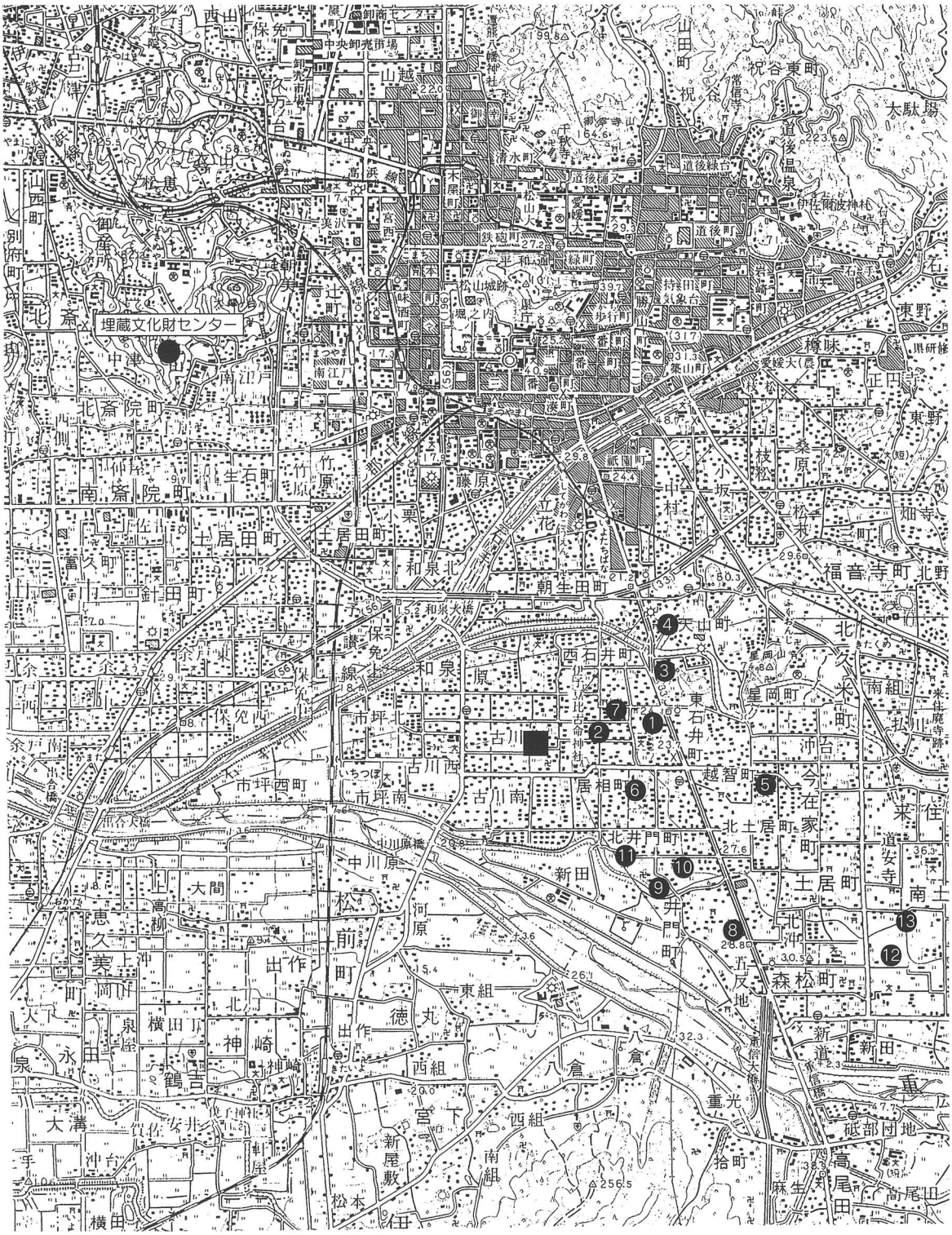
古川遺跡は松山平野南部、小野川と内川に挟まれた沖積低地に位置し、東方90mには松山市道千舟町古川線（通称、古川はなみずき通り）南北に延びる。平成14（2002）年の供用以降、沿道には飲食店、美容院等の各種商業施設が次々に建てられ、周囲に広がる田畑は急速にその姿を変えつつある。

平成19（2007）年５月18日、松山市保健福祉部子育て支援課（以下、子育て支援課）より、松山市古川北三丁目318番1、356番1、357番1（以下、申請地）における松山市保健センター南部分室・松山市南部児童センター整備工事にあたり、埋蔵文化財の確認調査申込書が、松山市教育委員会事務局文化財課（以下、文化財課）に提出された。申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の範囲外である。最寄りの包蔵地は南東に位置する「No.119 西石井遺物包含地」である。周辺では、西石井荒神堂遺跡１～３次調査、石井幼稚園遺跡１・２次調査、南中学校構内遺跡などの発掘調査が実施されている。調査地の東方では西石井遺跡１次調査が実施され、弥生時代から中世にかけての集落関連の遺構・遺物が多数確認されている。最寄りの遺跡としては、調査地の北側に近接する古川遺跡１～３次調査（松山市道北久米和泉線道路改良工事に伴う発掘調査、平成18年度実施）があげられ、古墳時代の溝や中世の土坑などが検出されている。

これらのことから、申請地における埋蔵文化財の有無を確認するため、平成20(2008)年３月12日～14日の間、文化財課の指導に基づき、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センター）が主体となり、確認調査を実施した。調査の結果、溝状遺構や柱穴のほか、弥生土器や土師器を含む遺物包含層が検出され、遺跡が遺存する可能性が高いと判断された。これらの結果を受け、子育て支援課と文化財課は協議を重ね、遺跡が確認された範囲について本調査が必要と判断した。本調査は文化財課の指導のもと埋蔵文化財センターが主体となり、子育て支援課の協力を得て2009（平成21）年３月２日から同年５月31日までの間に実施した。

２．刊行組織（平成22年３月31日現在）

松山市教育委員会	教育長	山内　泰
事務局	局長	藤田　仁
	企画官	古鎌　靖
	企画官	青木　茂
	企画官	佐々木乾二
文化財課	課長	家久則雄
	主幹	森　正経
	副主幹	三好博文



■ 古川遺跡４次

❶ 東石井遺跡　❷ 西石井遺跡　❸ 東山鳶が森古墳群　❹ 天山天王ヶ森遺跡　❺ 石井東小学校校内遺跡
❻ 南中学校構内遺跡　❼ 石井幼稚園遺跡　❽ 井門Ⅰ遺跡　❾ 井門Ⅱ遺跡　❿ 北井門遺跡１次
⓫ 北井門遺跡２・３次　⓬ 森松遺跡　⓭ 中の子廃寺

第１図　調査地周辺の遺跡分布図　(S=1:50,000)

財団法人松山市生涯学習振興財団	理　事　長	中　村　時　広
	事務局長兼松山市考古館館長	松　澤　史　夫
埋蔵文化財センター	所長兼総務課長	白　石　修　一
	次　　長	折　手　　均
	次　　長	重　松　佳　久
	調査担当リーダー	栗　田　茂　敏
	教育普及担当リーダー	梅　木　謙　一
	調　査　担　当	武　正　良　浩
		大　西　朋　子（写真担当）

調 査 地　松山市古川北三丁目３１８番１の一部
調査面積　594.925㎡
調査期間　平成21（2009）年３月２日～同年５月31日

３．環　境

（１）地理的環境

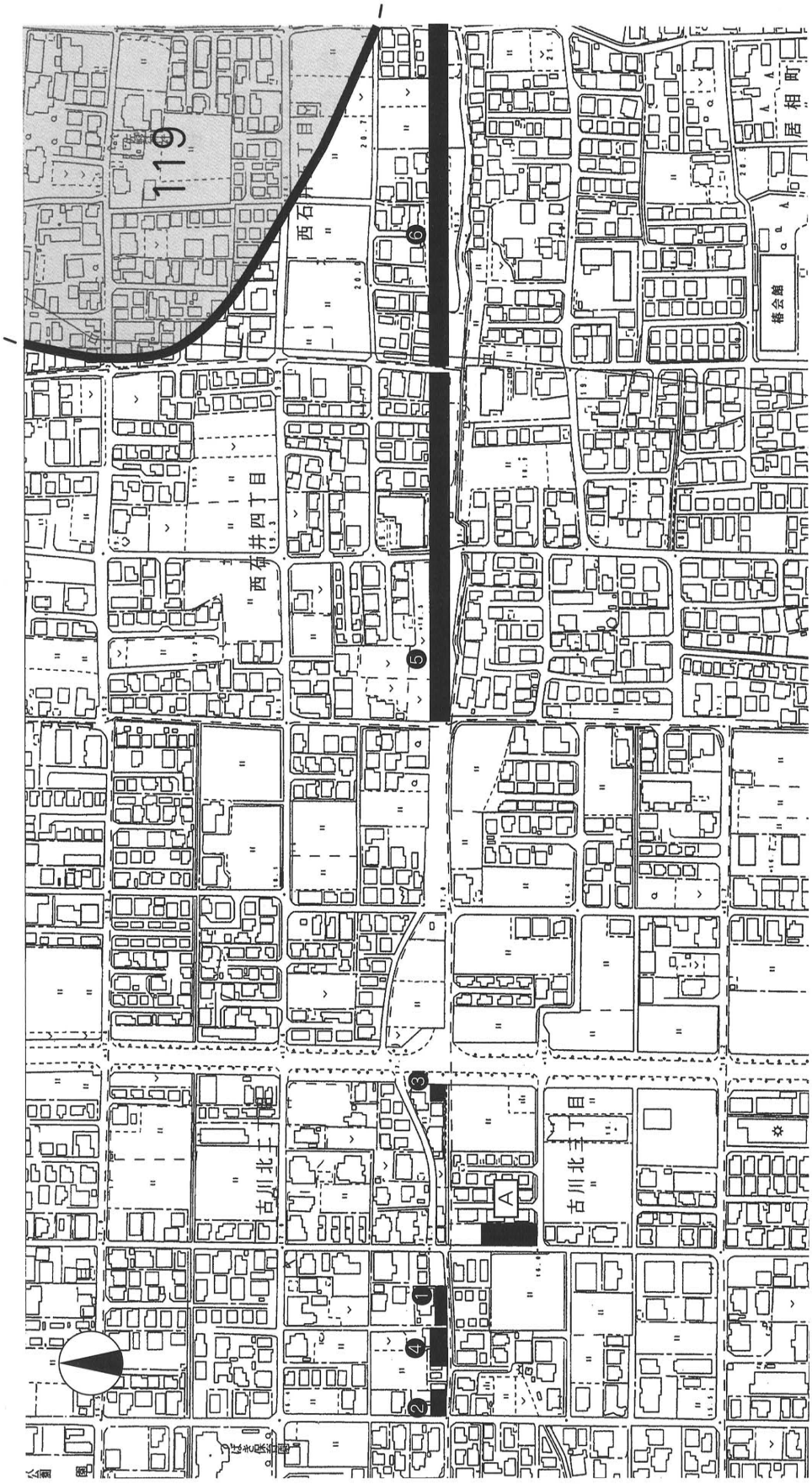
高縄半島南西隅に位置する松山平野は、四国愛媛県で最大の面積を持ち、西は瀬戸内海の伊予灘・斎灘に面し、南東部は西日本最高峰石鎚山系、北部は高縄山塊に囲まれた細長い三角州状の沖積低地帯である。その成り立ちは、主に一級河川である重信川とその支流である石手川や数多くの支流によって形成された扇状地、氾濫原、海岸部の海浜堆積物等で構成されている。調査地の所在する石井地区は、小野川・内川を含む重信川水系の堆積地で、和泉砂岩・結晶片岩系の砂礫層に覆われた扇状地及び扇状地性氾濫原である。重信川の一支流である内川は、東温市樋口の日吉谷に源を発し、松山市市坪南で重信川本流に合流する。石手川の支流である小野川は、小屋峠480mに源を発し、重信川と石手川の形成する三角形の中州のほぼ中央において南北に蛇行し、松山市保免上で石手川に合流する。蛇行部には左岸の「東山」、右岸東側の「星岡丘陵」、右岸西側の「天山丘陵」の三つの独立丘陵があり、「伊予三山」と呼称されている。

（２）歴史的環境

本調査地周辺では、開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査が増え、数多くの遺跡が見つかっている。

先土器～縄文時代

松山平野内では、先土器時代から縄文時代中期までの遺跡は稀薄であるが、。東石井遺跡２次調査の遺物包含層から縄文時代晩期中葉～後半の土器・石器が採取されている。石井地区北側には独立丘陵がある。丘陵上の東山鳶が森古墳群や天山天王ヶ森遺跡からはサヌカイト製のナイフ形石器が、それぞれ１点ずつ採集されている。また、南東約1.6kmに位置する井門Ⅱ遺跡では縄文時代後期の土器が多数出土し、近接する北井門遺跡３次調査では縄文時代晩期の竪穴住居址が検出されている。



A 古川遺跡４次調査　　松山市埋蔵文化財包蔵地　NO.119　西石井遺物包含地（概略ライン）

❶ 古川遺跡１次調査　❷ 古川遺跡２次調査　❸ 古川遺跡３次調査　❹ 古川遺跡５次調査　❺ 西石井遺跡１次調査　❻ 西石井遺跡２次調査

第２図　調査地と周辺の遺跡

弥生時代

前期の資料は、調査地南東部にある石井東小学校構内遺跡において土坑と土器棺墓が確認されている。土坑出土品や土器棺（壺棺）は前期前半の良好な資料である。また、調査地南東部にある南中学校構内遺跡からは、前期後半の土器が出土した溝が検出されている。溝出土品は、松山平野の前期後半の土器編年における基準資料である。古川遺跡２次調査では溝が確認されている。

中期の資料はなく、後期以降、遺跡の広がりが認められる。

後期の資料は、石井幼稚園遺跡２次調査において後期前半の土坑が確認されている。後期後半から終末では、石井東小学校構内遺跡より多数の竪穴住居址が検出されている。西石井遺跡４次調査では内部施設に周壁溝と炉をもつ竪穴住居址が確認されている。西石井荒神堂遺跡では竪穴住居址と土器棺墓（壺棺）が検出されている。西石井荒神堂遺跡３次調査では後期後葉に掘られ、後期末に埋没したと考えられる区画溝が検出されている。東石井遺跡２次調査では後期終末に属する可能性が高い溝が検出されている。東石井遺跡３次調査では１つの遺構内から７個体分の高坏が出土した土坑が確認されている。近接する古川遺跡１次調査からは溝（後期末）、土坑・土器棺（後期後半）、同遺跡３次調査では河川が検出されている。また、南東方の北井門遺跡１次調査において弥生時代後期から古墳時代の竪穴住居址が約200棟見つかっている。

古墳時代

前期の資料は、西石井遺跡４次調査において平面形態が方形を呈する竪穴住居址が確認されている。中期の資料は、石井幼稚園遺跡１次調査と同２次調査において竪穴住居址がそれぞれ１棟ずつ確認されている。東石井遺跡２次調査では中期末～後期に属する可能性が高い溝が検出されている。西石井荒神堂遺跡２次調査では中期から後期に属すると考えられる竪穴住居址、掘立柱建物址が多数検出されている。生産跡としては、南東方にある森松遺跡から中期の水田跡が検出されている。一方、古墳は石井東小学校構内遺跡において、周溝と思われる溝が検出されている。また、北井門遺跡１次調査では古墳時代前期の前方後方墳が検出されている。平野内においては数少ない沖積地上の古墳となり、平野における墳墓研究の一考となる好資料である。

古代～中世

古代において、石井地区は久米郡石井郷に属している。石井郷内には、調査地南東方に延喜式内社である「伊予豆比子命神社」(いよづひこのみことじんじゃ）が存在する。西石井荒神堂遺跡２次調査では６世紀末から７世紀初めと考えられ、井戸としての機能が想定される遺構が検出されている。石井幼稚園遺跡１次調査からは、平安時代の溝が検出されており、溝内からは大量の土師器、須恵器のほか、緑釉陶器や灰釉陶器が出土している。溝出土の土師器は、平野内における古代後半の土師器編年の基準資料になっている。古川遺跡１次調査では平安時代10～11世紀に比定される土坑が確認されている。石井幼稚園遺跡２次調査からは古代から中世の掘立柱建物址や中世の土坑、同１次調査からも中世の土坑が確認されている。西石井遺跡４次調査では柱穴から土師器の皿、坏が出土している。東石井遺跡３次調査では溝、柱穴等が確認されている。また、南東方にある中ノ子廃寺跡からは白鳳期の平隆寺式や法隆寺式系の軒丸瓦の系譜を持つ複弁八弁蓮華文軒丸瓦や忍冬唐草文軒平瓦、均整唐草文軒平瓦が出土している。

近世

調査地及び周辺は内川と小野川の水利を多分に享受している地域である。内川の中流域は江戸中期から幕末にかけて、自然湧水による地下水の開発利用が進展した。寛延二（1749）年高井村庄屋相原経寿の開鑿した野津（都）合泉、宝暦年間に開鑿した大割泉、宝暦十（1760）年開鑿の五反地泉、嘉永七（1854）年久米郡代官目下正倫によって開鑿された日下泉、弘法大師ゆかりの杖の淵、立待泉など内川沿いのベルト状地帯には、自然湧泉が多い。小野川流域では和泉村庄屋森太郎左衛宋勘が慶長十一（1606）年に完成した縦淵堰から導水路を開鑿して、和泉村70余町歩の良田化に成功した。

〔参考文献〕

森　光晴　1980『浮穴・西石井荒神堂・束本Ⅱ・Ⅲ・桑原高井遺跡』松山市教育委員会

松山市史編集委員会　1992「松山市史　第一巻 自然 原始 古代 中世」

重松　佳久　1992「石手川水系に於ける旧石器文化」『桑原地区の遺跡』
松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

栗田　茂敏　1994『石井幼稚園遺跡・南中学校構内遺跡－第２次調査－』
松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

松山市立石井北小学校　1997『ふるさと石井北』

梅木　謙一　1998「石井東小学校構内遺跡」『石井・浮穴の遺跡』
松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

中野良一・作田一耕・多田仁・成田淳・伊藤嘉浩・白石将高・平岡孝司　1999
『井門Ⅰ遺跡・井門Ⅱ遺跡』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

吉岡　和哉　2001「西石井荒神堂遺跡２次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報13』

河野　史知　2004「西石井荒神堂遺跡３次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報16』

吉岡　和哉　2005「東石井遺跡２次調査遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報17』

髙尾　和長　2006「東石井遺跡３次調査遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報18』

宮内慎一・梅木謙一・水本完児・相原秀仁・大西朋子　2006『東石井遺跡・西石井遺跡－１・２・３次調査地－』
松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

相原　秀仁　2007「古川遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報19』

相原　秀仁　2007「古川遺跡２次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報19』

相原　秀仁　2007「古川遺跡３次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報19』
松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

髙尾　和長・山之内志郎　2008「西石井遺跡４次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報20』
松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター　2009「北井門遺跡２・３次」現地説明会資料

第２章　調査の概要

１．試掘調査

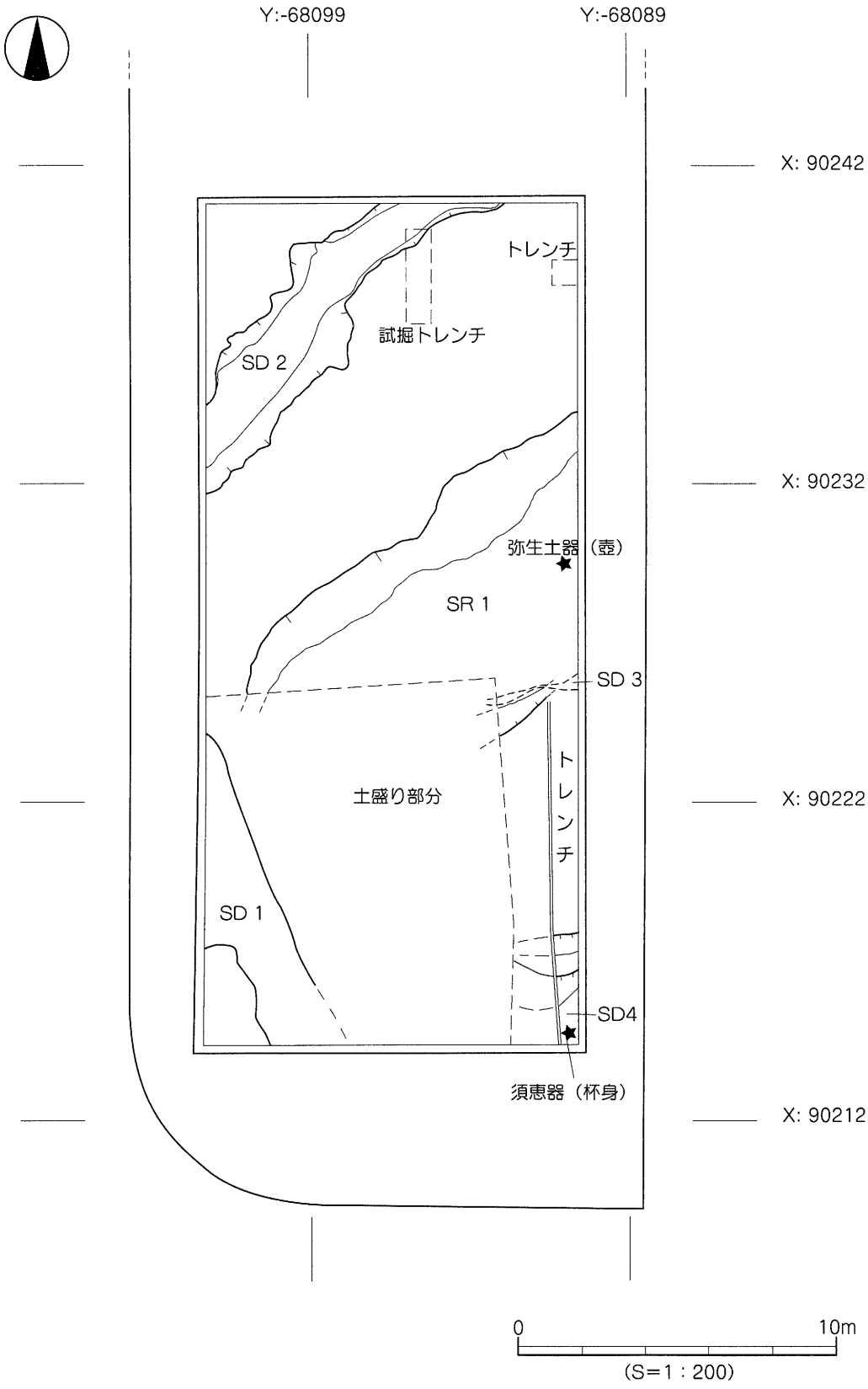
試掘調査地は生活道路により２箇所に分かれており、申請地南側（市保健センター南部分室・市南部児童センター建設予定地）をＡ区、北側（両センター駐車場予定地）をＢ区として調査を行った。なお、Ａ区には９本のトレンチ（Ｔ１～９）、Ｂ区では３本のトレンチ（Ｔ10～12）を設定し、土層観察と遺構･遺物の確認作業を実施した。その結果、Ａ区では明確な遺構･遺物は検出されなかった。一方、Ｂ区の南側から溝状遺構や柱穴のほか、弥生土器や土師器を含む遺物包含層が検出され、遺跡が遺存する可能性が高いと判断された。試掘調査の結果を受け、駐車場予定地が本調査対象地となった。調査面積は総面積3,665.21㎡の内594.925㎡である。

２．調査の経過

調査は３月２日～３月11日まで仮設事務所設置、調査地周辺整備、発掘機材搬入等の諸準備を行い、３月12日～５月30日まで野外調査を実施した。以下、調査工程を略記する。

３月12日(木)　重機により調査区南側の掘削を行う。手作業による調査区内簡易整備を行う。
３月17日(火)　委託業者による国土座標第Ⅳ系に基づく基準点測量杭を打設する。
３月18日(水)　重機により調査区南側に遺存する客土の掘り下げを行う。
３月19日(木)　松山市都市整備部公共建築課の指導により、調査区外側の安全柵を三角コーンから丸太杭、トラロープに変更する。
３月23日(月)　調査区南側、遺構検出作業。
３月27日(金)　調査区南側、高所作業車にて遺構検出状況写真撮影（大西朋子調査員）。
３月30日(月)　ＳＤ１の掘り下げ作業。
４月　７日(火)　埋文センター内の整理作業再開。
４月16日(木)　現場作業再開。以後、調査区南側の掘り下げ作業（客土除去）。
５月　１日(金)　調査区南側、高所作業車にて客土除去状況の写真撮影（大西調査員）。
５月　２日(土)　調査区南側、測量作業。
５月　７日(木)　調査区南側、重機による埋め戻し作業。
５月　８日(金)～12日(火)　調査区北側、重機による掘削作業。
５月13日(水)　調査区北側、遺構検出作業。午前中、埋文センター職員による現場検討会を開催する。
５月14日(木)　調査区北側、遺構検出状況写真撮影（大西調査員）。以後、遺構の掘り下げ。
５月23日(土)　10：00～11：30、現地説明会を開催。58名の市民の皆様に参加して頂いた。
５月28日(木)　調査区北側、高所作業車にて完掘状況写真撮影（大西調査員）。
５月29日(金)　調査区北側、重機による埋め戻し作業。

第３図　　調査区・試掘トレンチ位置図


Y:-68099
Y:-68089
X: 90242
X: 90232
X: 90222
X: 90212
トレンチ
試掘トレンチ
SD 2
弥生土器（壺）
SR 1
SD 3
土盛り部分
トレンチ
SD 1
SD4
須恵器（杯身）
0
10m
(S=1：200)

第４図　　遺構配置図

5月30日(土)　発掘機材搬出作業。重機による埋め戻し作業終了。なお、当現場で設置した仮設事務所は、近隣において埋文センターが実施する他の発掘調査において使用するため、今回は撤去を行わなかった。

3．層位

調査地は松山平野南部、小野川と内川とに挟まれた沖積低地に位置し、標高約15.5ｍに立地する。調査以前は耕作地であったが、調査直前は両センター建設現場から排出された土置き場や建設作業車の待機場所として利用されていた。調査地の基本層位は、第Ⅰ層：造成土、第Ⅱ層：耕作土、第Ⅲ層：近現代の客土、第Ⅳ層：黒色系粘土、第Ⅴ層：黒褐色粘質土、第Ⅵ層：暗灰黄色微砂層、第Ⅶ層：灰オリーブ色系土、第Ⅷ層：灰オリーブ色系微粒土、第Ⅸ層：緑灰色粘土である。

第Ⅰ層：工事に伴う造成土（真砂土・再生ＲＣバラス）。３層に分かれる。層厚10～27cmを測る。

Ⅰ－ａ：造成土（客土・再生ＲＣバラス）

Ⅰ－ｂ：造成土（客土・真砂土）

Ⅰ－ｃ：造成土（客土・耕作土＋排土）

第Ⅱ層：現代の耕作土。調査区全域で見られ、４層に分けられる。層厚６～27cmを測る。

Ⅱ－ａ：5B　4/1（暗青灰色土）〔耕作土〕

Ⅱ－ｂ：5GY　5/1（オリーブ灰色土）〔耕作土、やや粘性を帯びる〕

Ⅱ－ｃ：2.5Y　6/2（灰黄色粘質微砂）〔床土〕

Ⅱ－ｄ：2.5Y　6/3（にぶい黄色微砂）〔床土〕

第Ⅲ層：耕作地を水平に保つために搬入された近現代の客土で２つに分けられる。調査区南側に遺存し、層厚10～32cmを測る。層中からは多量の弥生土器片・土師器片と少量の陶磁器片・瓦片（近現代）が出土した。

Ⅲ－ａ：2.5Y　7/3（浅黄色粘質微砂）

Ⅲ－ｂ：2.5Y　3/1（黒褐色粘質土）〔灰黄色混、２～4cm丸礫混〕

第Ⅳ層：にぶい黄褐色或いは黒色を呈する粘土層で調査区全域に堆積する。５層に細分され、層厚５～45cmを測る。

Ⅳ－ａ：10YR　5/4（にぶい黄褐色粘土）〔強粘性〕

Ⅳ－ｂ：5Y　2/1（黒色粘土）〔強粘性〕

Ⅳ－ｃ：5Y　2/1（黒色粘土、強粘性）＋2.5Y　5/3（黄褐色粘質土、丸状のブロック混）

Ⅳ－ｄ：10YR　5/4（にぶい黄褐色粘土）〔強粘性〕＋SR1埋土が斑に混じる

Ⅳ－ｅ：5Y　2/1（黒色粘土、強粘性）〔砂粒が混じる〕

第Ⅴ層：黒褐色粘質土で調査区北側に堆積する。層厚６～14cmを測る。

：2.5Y　3/2（黒褐色粘質土）

第Ⅵ層：暗灰黄色微砂層で調査区ほぼ全域に堆積する。層厚５～15cmを測る。

：2.5Y　5/2（暗灰黄色微砂層）〔低い粘性〕

第Ⅶ層：調査区北側に堆積し、オリーブ黄色微砂層と灰色微粒土の二つに分層される。層厚５～26cmを測る。

Ⅶ－ａ：5Y　6/3（オリーブ黄色微砂層）〔乾くと硬性〕北壁

Ⅶ－ｂ：7.5Y　4/1（灰色粘質土）北壁

第Ⅷ層：灰オリーブ色を呈する微粒土層で四つに分層される。層厚10～50cmを測る。

Ⅷ－ａ：5Y　5/2（灰オリーブ色粘質微粒土）〔5Y　6/1灰色が斑に混じる〕

Ⅷ－ｂ：7.5Y　4/1（灰色微粒層）

Ⅷ－ｃ：5Y　5/3（灰オリーブ色微砂層）

Ⅷ－ｂ：2.5GY　4/1（暗オリーブ灰色粘質微粒層）

第Ⅸ層：緑灰色粘土で調査区南側に堆積する。層厚10～27cmを測る。

：10GY　6/1（緑灰色粘土）〔強粘性〕

間層　間層ａ：2.5Y　3/2（黒褐色粘質土）〔砂粒混、一部砂質系〕北壁

間層ｂ：7.5Y　5/3（灰オリーブ色砂礫層）〔3～5cm大の丸礫多混〕北壁

間層ｃ：2.5Y　6/3（にぶい黄色粗砂層）

遺構埋土

ＳＲ１：2.5Y　4/1（黄灰色粘土）〔強粘性　2.5Y　5/6黄褐色が筋状に混じる〕

ＳＤ２－①：10YR　3/1（黒褐色粘土）〔粘性やや強い〕

－②：2.5Y　3/1（黒褐色砂礫層）〔5～25mm程度の丸礫多混〕

－③：5Y　3/2（オリーブ黒色微砂層）〔やや粘性を帯びる〕

ＳＤ３－①：10YR　2/2（黒褐色粘土）

－②：10YR　2/2（黒褐色粘土）〔微砂が少々混じる〕

ＳＤ４－①：7.5YR　3/2（黒褐色粘質土）

－②：5YR　4/1（褐灰色砂質土）〔やや粘性を帯びる〕

－③：2.5Y　5/4（黄褐色粗砂層）

－④：5YR　3/1（黒褐色粘質土）〔粘性強い〕

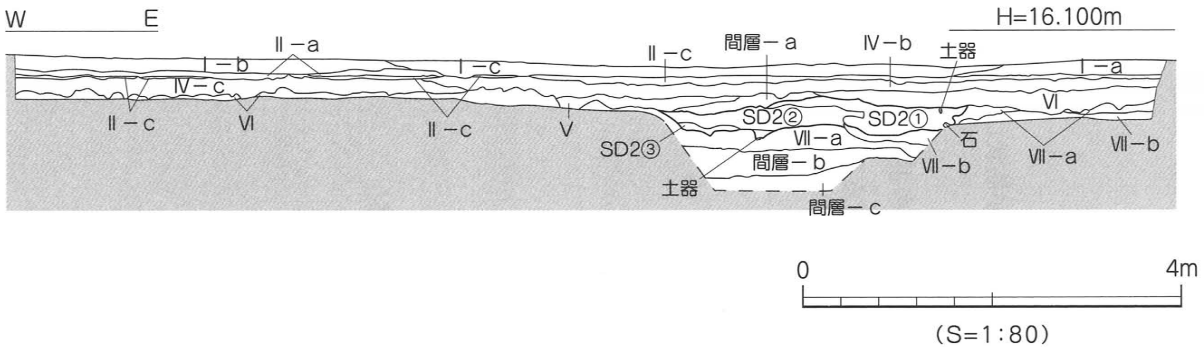
－⑤：5YR　2/3（極暗赤褐色粘土）

－⑥：7.5YR　3/1（黒褐色粘土）

－⑦：7.5YR　2/1（黒色粘土）

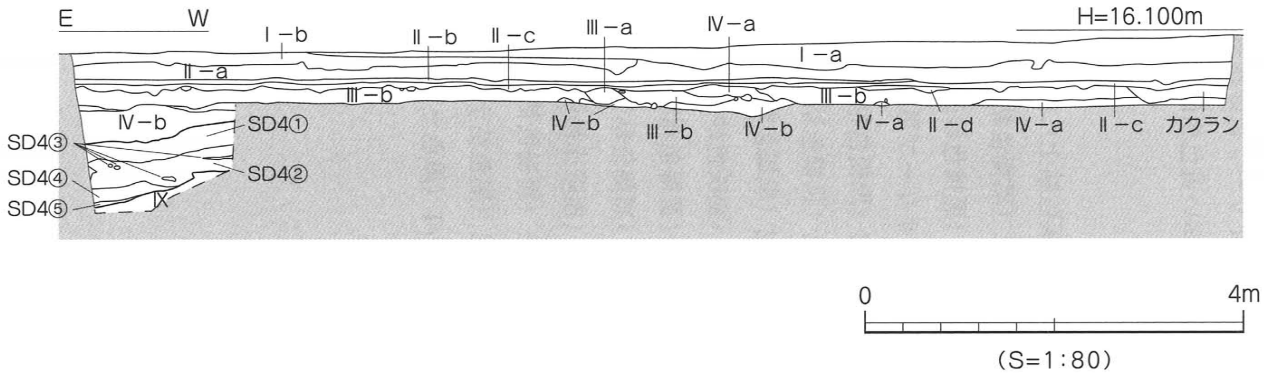
－⑧：7.5YR　1.7/1（黒色土）〔締まりのないフサフサ感〕

北壁



（S=1:80）

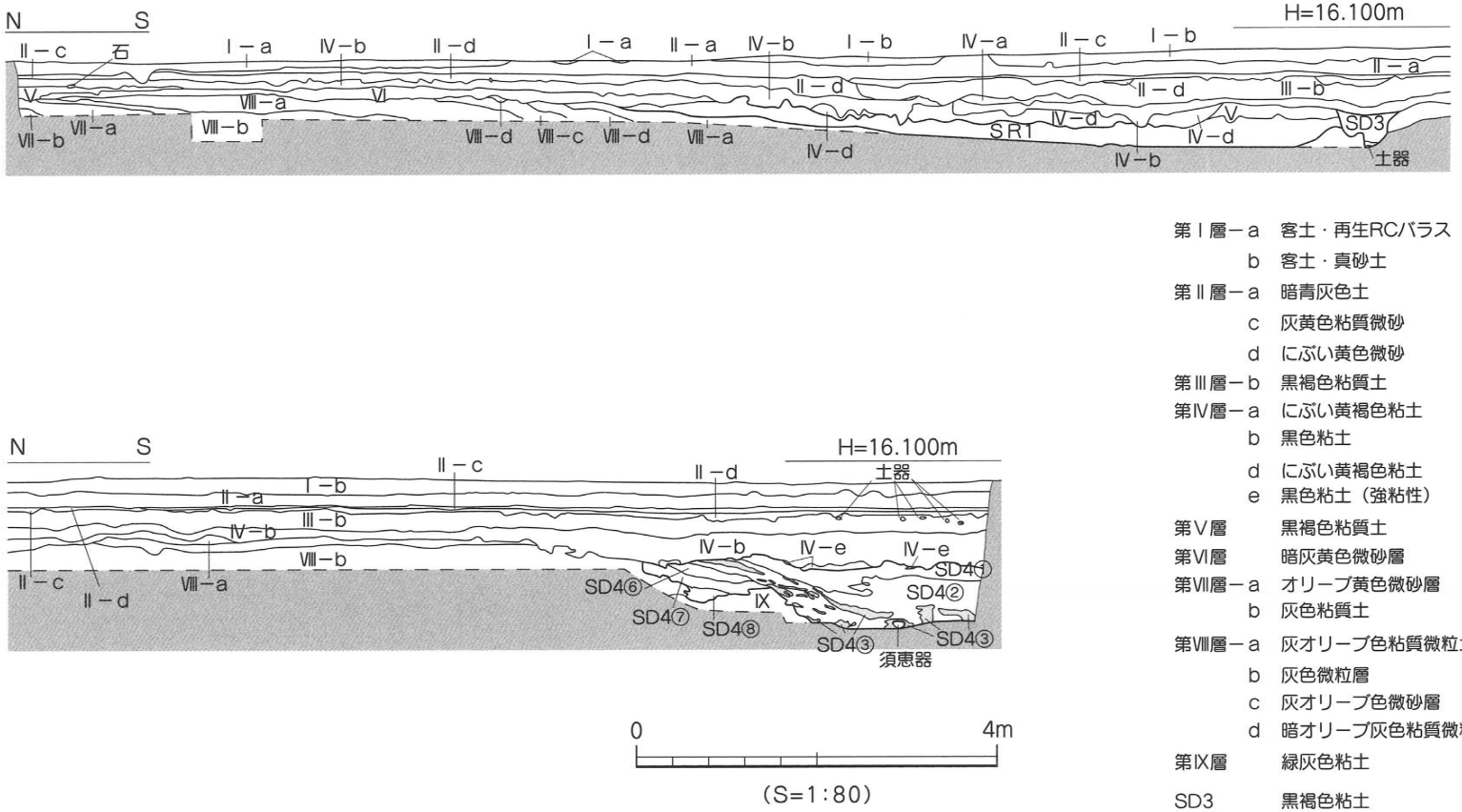
南壁



（S=1:80）

第Ⅰ層－a　客土・再生RCバラス
　　b　客土・真砂土
　　c　客土・耕作土＋排土
第Ⅱ層－a　暗青灰色土
　　b　オリーブ灰色土
　　c　灰黄色粘質微砂
　　d　にぶい黄色微砂
第Ⅲ層－a　浅黄色粘質微砂
　　b　黒褐色粘質土
第Ⅳ層－a　にぶい黄褐色粘土
　　b　黒色粘土
　　c　黒色粘土（強粘性）
第Ⅴ層　黒褐色粘質土
第Ⅵ層　暗灰黄色微砂層
第Ⅶ層－a　オリーブ黄色微砂層
　　b　灰色粘質土
第Ⅸ層　緑灰色粘土
SD2　①　黒褐色粘土
　　②　黒褐色砂礫層
　　③　オリーブ黒色微砂層
SD4　①　黒褐色粘質土
　　②　褐灰色砂質土
　　③　黄褐色粗砂層
　　④　黒褐色粘質土
　　⑤　極暗赤褐色粘土
間層－a　黒褐色粘質土
　　b　灰オリーブ色砂礫層
　　c　にぶい黄色粗砂層

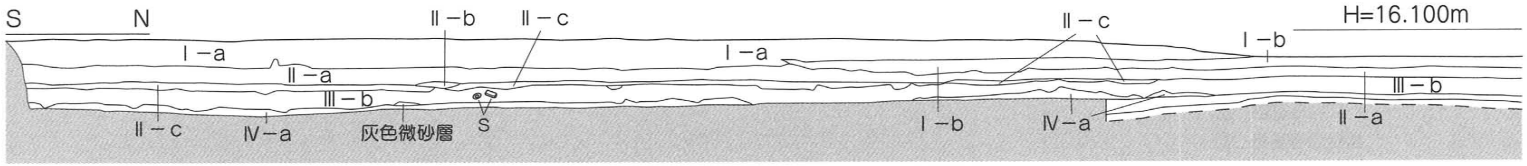
第5図　　調査区北壁・南壁土層図

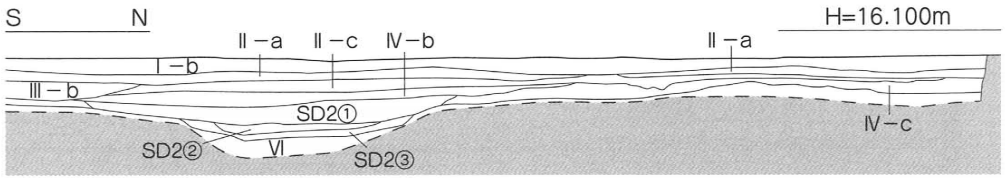


第Ⅰ層－a　客土・再生RC/バラス
　　b　客土・真砂土
第Ⅱ層－a　暗青灰色土
　　c　灰黄色粘質微砂
　　d　にぶい黄色微砂
第Ⅲ層－b　黒褐色粘質土
第Ⅳ層－a　にぶい黄褐色粘土
　　b　黒色粘土
　　d　にぶい黄褐色粘土
　　e　黒色粘土（強粘性）
第Ⅴ層　黒褐色粘質土
第Ⅵ層　暗灰黄色微砂層
第Ⅶ層－a　オリーブ黄色微砂層
　　b　灰色粘質土
第Ⅷ層－a　灰オリーブ色粘質微粒土
　　b　灰色微粒層
　　c　灰オリーブ色微砂層
　　d　暗オリーブ灰色粘質微粒層
第Ⅸ層　緑灰色粘土

SD3　黒褐色粘土
SD4　①　黒褐色粘質土
　　②　褐灰色砂質土
　　③　黄褐色粗砂層
　　⑥　黒褐色粘土
　　⑦　黒色粘土
　　⑧　黒色土
SR1　黄灰色粘土

第６図　　調査区東壁土層図





(S=1:80)

第Ⅰ層－a　客土・再生RCバラス
　　b　客土・真砂土
第Ⅱ層－a　暗青灰色土
　　b　オリーブ灰色土
　　c　灰黄色粘質微砂
第Ⅲ層－b　黒褐色粘質土
第Ⅳ層－a　にぶい黄褐色粘土
　　b　黒色粘土
　　c　黒色粘土（強粘性）
第Ⅵ層　暗灰黄色微砂層
SD2　①　黒褐色粘土
SD2　②　黒褐色砂礫層
SD2　③　オリーブ黒色微砂層

第7図　　調査区西壁土層図

4．遺構と遺物

本調査で検出した遺構は自然流路１条（ＳＲ１）、溝３条である。また、第Ⅷ層中から弥生土器が出土した。なお、ＳＤ１は客土中から検出された。詳細は省略する。

ＳＲ１（第８図）

調査区中央部で検出した。検出規模は長さ 13.6 m、幅 6.5 m、深さ 35cmを測る。主な埋土は黄灰色粘土（2.5Y　4/1）で強い粘性を帯び、黄褐色（2.5Y　5/6）が筋状に混じる。遺物は弥生土器、木片が出土している。

出土遺物（第９図）

１は外傾し、直線的に立ち上がる壺形土器の体部片。外面は丁寧なナデ調整が施される。２はやや外反し、立ち上がる壺形土器の口縁部片。頸部付近に１条の明瞭な沈線が施される。外面にはハケ目調整痕が残る。３は残存長 28cm、径３cmを測る棒状の芯持ち材。全体に焦げ跡が残る。樹種はコナラ属アカガシ亜属。

時　期　出土遺物は弥生時代後期後半と考える。

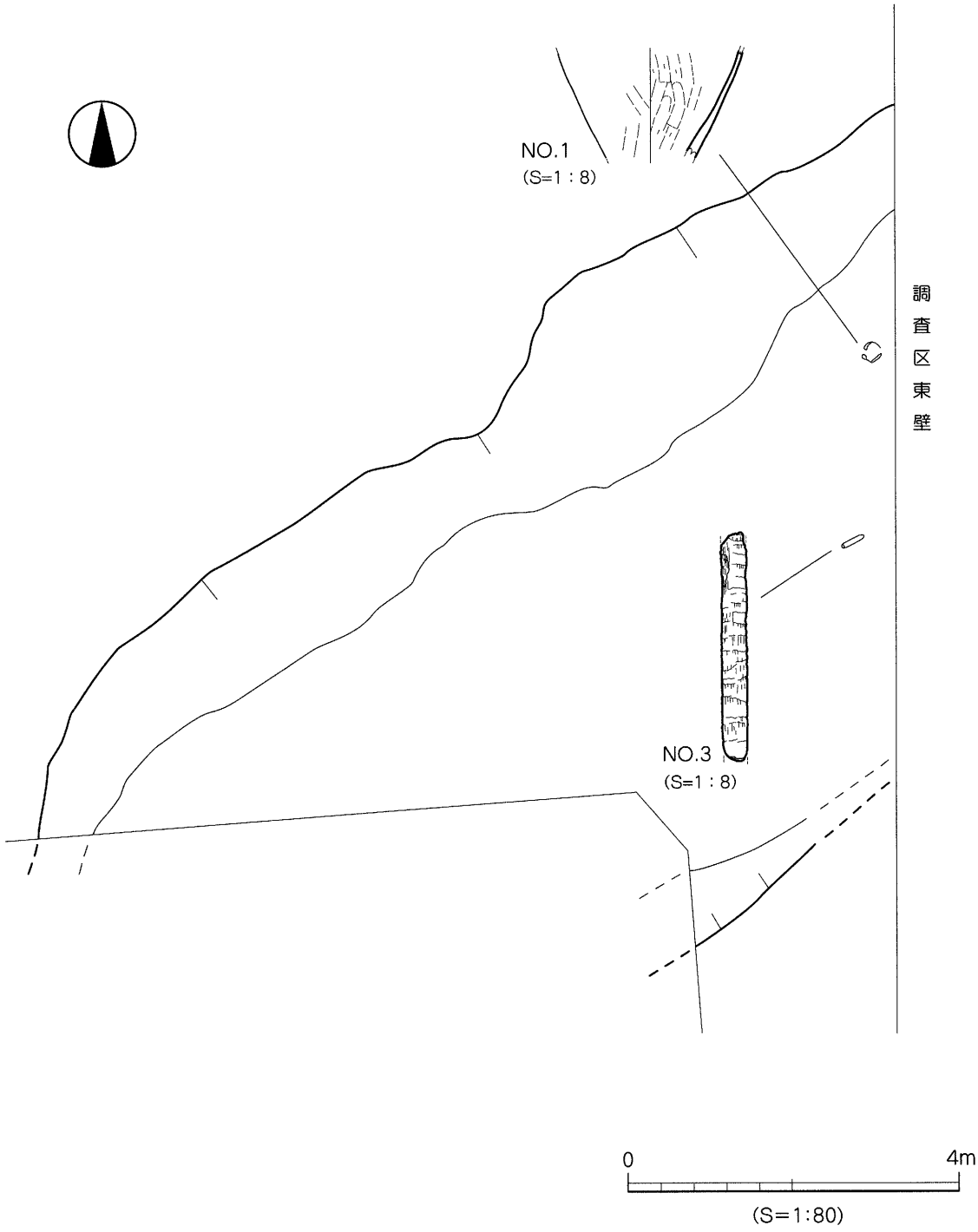
ＳＤ２（第 10 図）

調査区北側で検出した。検出規模は長さ 10.4 m、幅３m、深さ 35cmを測る。主な埋土は上から黒褐色粘土（10YR　3/1）、黒褐色砂礫層（2.5Y　3/1）、オリーブ黒色微砂層（5Y　3/2）である。砂礫層には５～25㎜程度の丸礫が多く含まれ、下層はやや粘性を帯びる。遺物は弥生土器、土師器、木片、種子が出土している。

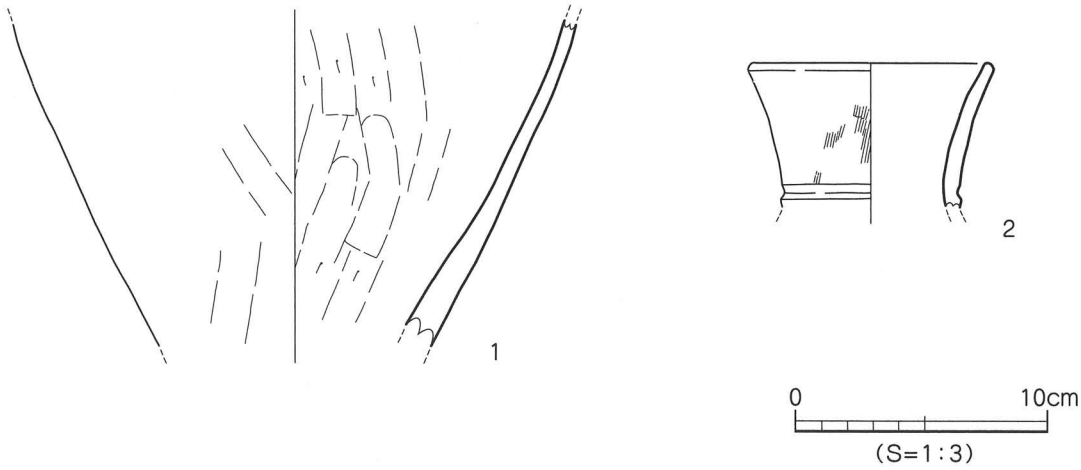
出土遺物（第 11・12 図）

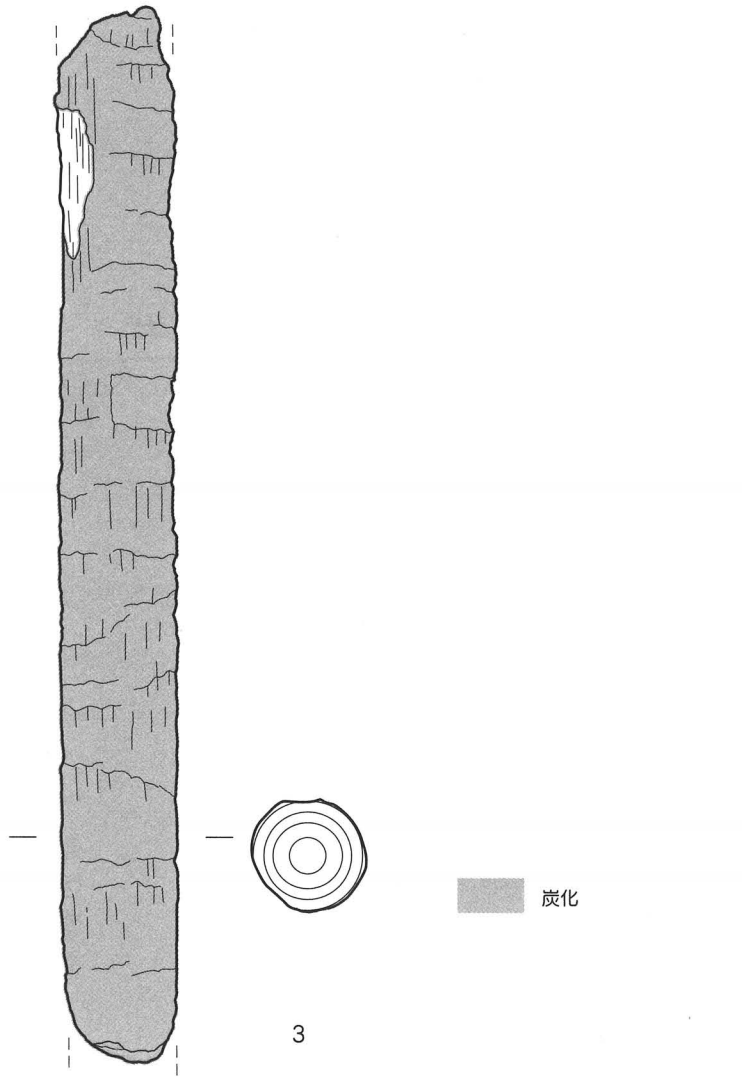
４は「く」の字状に屈曲する甕形土器の口縁部。端部はやや細く仕上げられる。５～９は壺形土器。５は面をなす口唇端面に刻み目が施される。６・７は複合口縁壺の拡張部片。６は外面に円形浮文が貼付される。端部は細く仕上げられる。７は「く」の字状の屈曲外面端部に刻み目が施される。８は外反する頸部片。頸部と口縁部の境目は稜をなす。９の口縁端面は撫でにより拡張され、中央は僅かに凹む。10～12 は鉢形土器。10 の口縁端面は撫でにより拡張され、中央は僅かに凹む。11 の口縁部は短く緩やかに外反する。外面にハケ目調整痕が残る。12 は口縁部の屈曲内側がやや肥厚される。13～16 は底部片。13 はやや広めの平底を呈する。14 の体部は底部から僅かに段をなし、やや内反的に立ち上がる。15 は狭小な底部を残す。16 の体部は緩やかに外反して立ち上がる。17 は高坏の坏柱部片。18 は支脚の上部片。面をなす口唇部には明瞭な刻み目が施される。内側には指頭圧痕を看取。19 は板状の木片。樹種はヒノキ科。

時　期　出土遺物は弥生時代後期後半と考える。

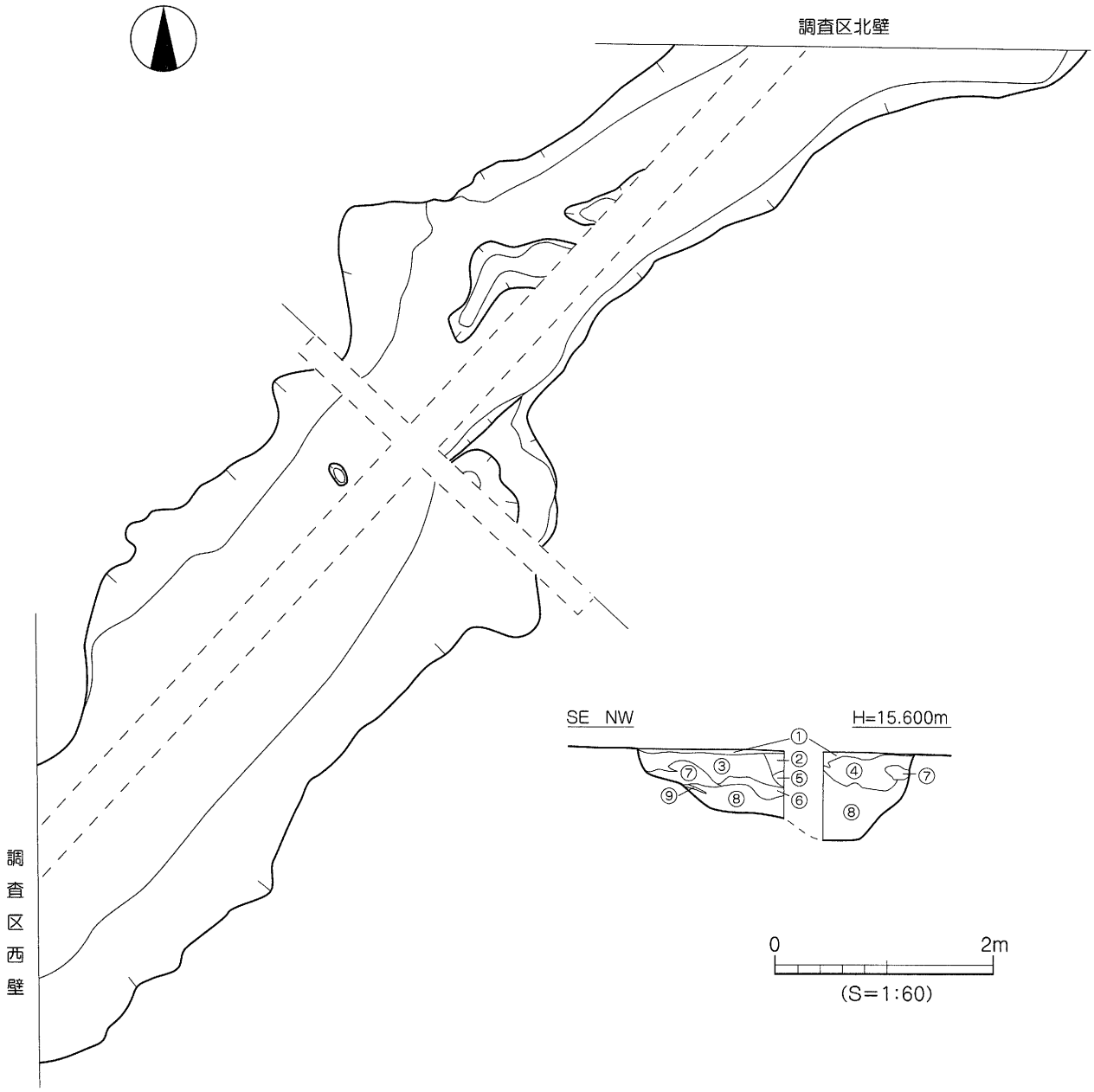


第8図　　SR1 測量図



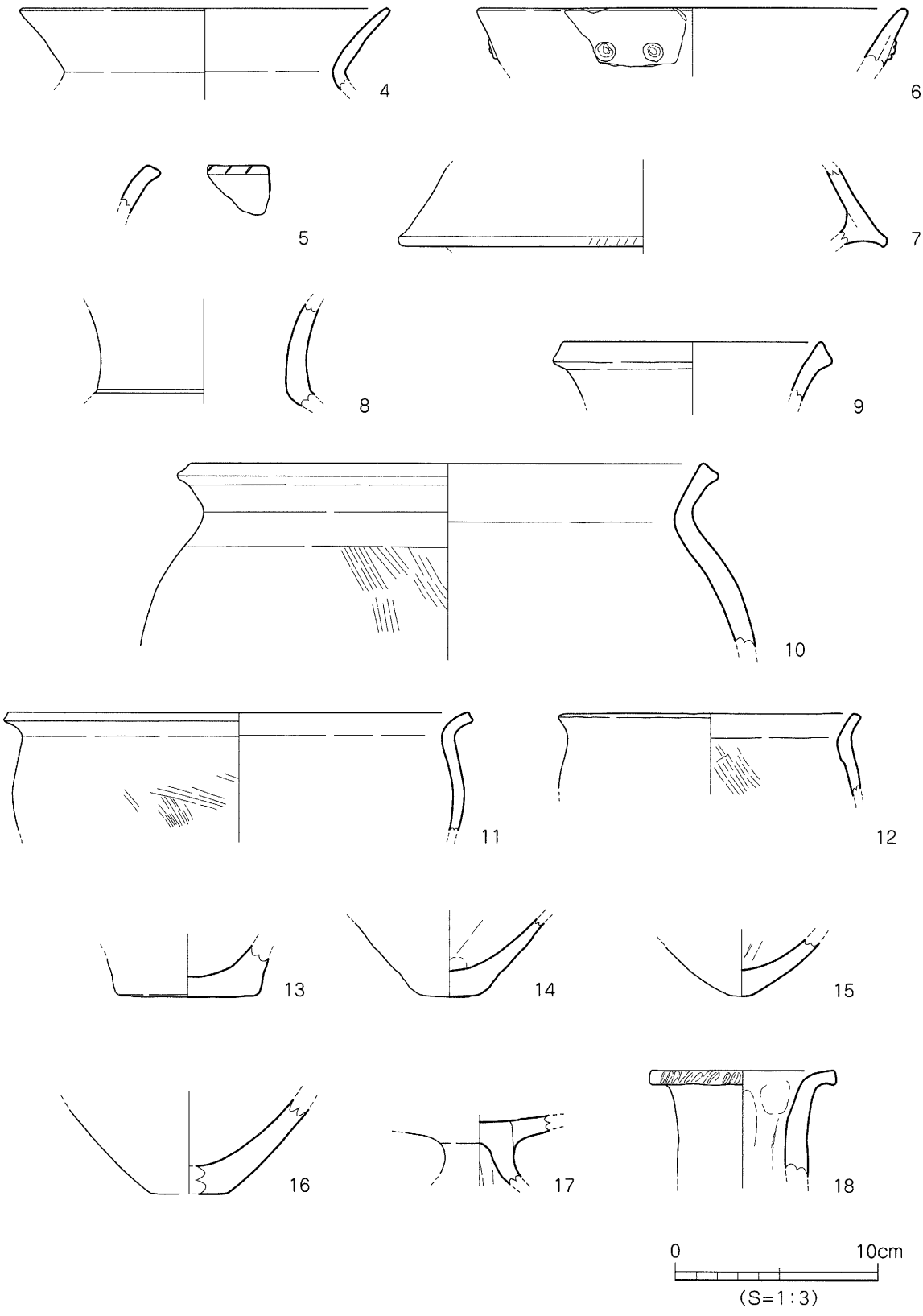


第9図　　SR1出土遺物実測図

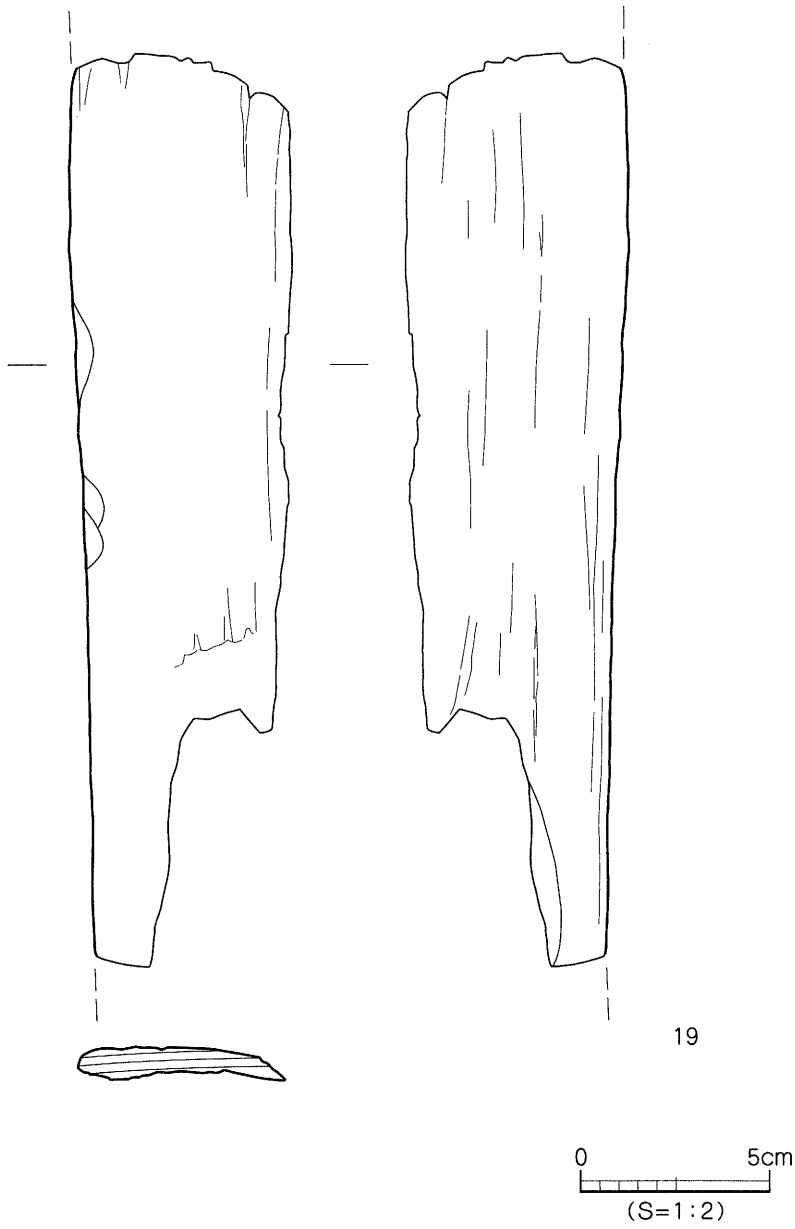


① 黒色粘土（強粘性） 5Y2/1
② 黒褐色砂層 10YR3/1
③ 黒褐色粘土（粘性やや強い） 10YR3/1
④ 黒褐色粘土 10YR3/1＋(浅黄色粘質土 5Y7/4)
⑤ 黒褐色砂礫層 2.5Y3/1
⑥ オリーブ黒色微砂層 5Y3/2
⑦ オリーブ黄色微砂層 5Y6/3
⑧ 灰色粘質土 7.5Y4/1
⑨ オリーブ黒色粘質土 5Y3/1

第 10 図　　SD2 測量図



第11図　　SD2　出土遺物実測図（1）



第 12 図　　SD2 出土遺物実測図（2）

ＳＤ３（第13図）

調査区中央部、東壁付近で検出した。検出規模は長さ2.7ｍ、幅57cm、深さ25cmを測り、東から西に掘削された溝。埋土は黒褐色粘土（10YR　2/2）で下方には微砂が少々混じる。遺物は溝底付近から弥生土器の小片、木片が出土している。

出土遺物（第13図）

20は、長さ34.6cm、幅５cm、厚さ0.8cmを測る板材。中央部に厚さが同程度の小片が付着していた。樹種はヒノキ。なお、土器の小片は図化出来なかった。

時　期　遺構埋土がＳＤ２と似ていることと出土遺物から概ね弥生時代後期と考える。

ＳＤ４（第14図）

調査区南側で検出した。検出規模は長さ3.5ｍ、幅3.9ｍ、深さ56cmを測り、東西方向に掘削された溝で、溝下位には粗い砂が堆積している。埋土は８層に細分され、主に黒褐色を基調とし、粘質を帯びる土質となる。遺物はこの粗砂の中から弥生土器、須恵器、木片が出土した。

出土遺物（第15・16図）

21は弥生土器の鉢形土器である。狭小な平底からやや内湾して立ち上がる。22は須恵器の坏身。受部はやや上向きに外方へ延びる。たちあがりは内傾し、端部内側は稜をなす。底部外面は回転ヘラケズリ調整が施される。23～28は木片。23は自然木と考えられるが、上方に加工痕を看取。樹種はウツギ属。24は棒状の割材で樹種はアスナロ。25は板状木片。樹種はモミ属。26は杭。先端部に加工痕（削り）を看取。樹種はスダジイ。27は芯持ち材で先端部に加工痕を看取。約１／２程度、樹皮が残る。樹種はコナラ属コナラ亜属クヌギ節。28は芯持ち材。杭として使用されたと考えられる。先端部、枝部に加工痕が残る。樹種はヒサカキ。

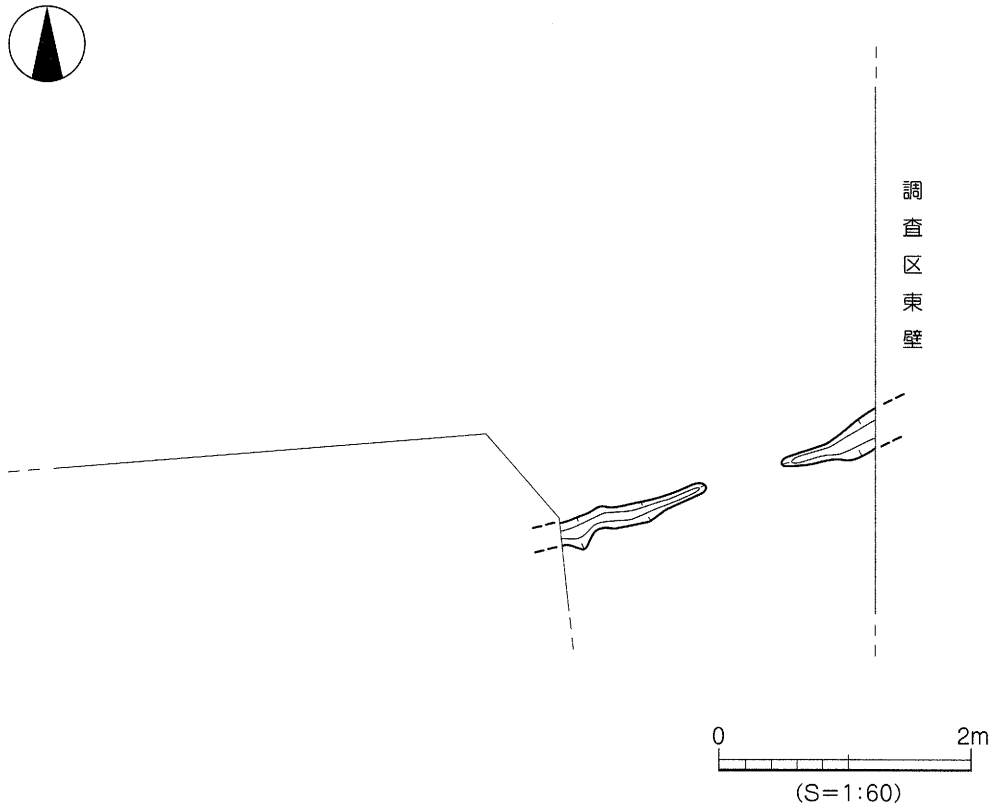
時　期　出土遺物は古墳時代後期と考える。

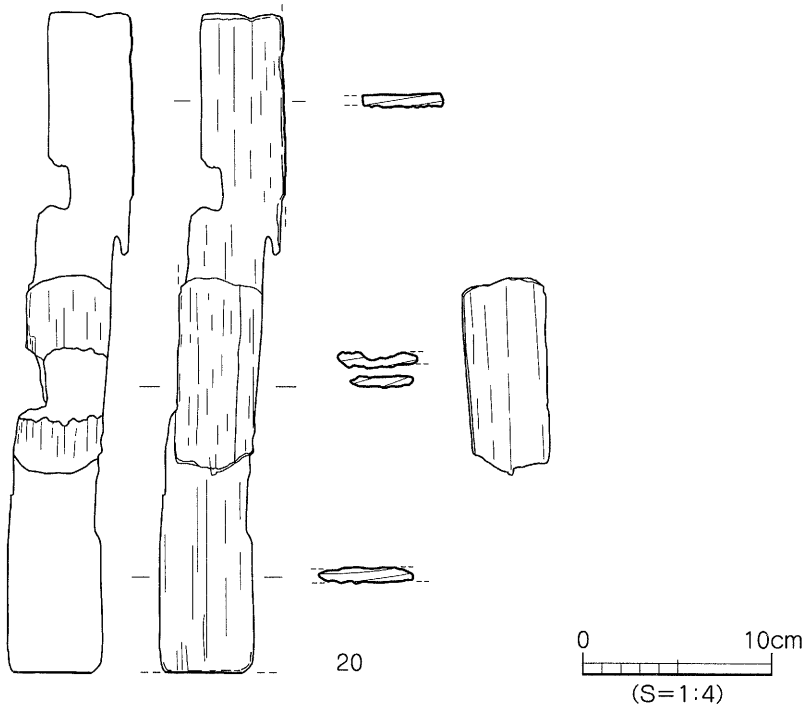
トレンチ内出土遺物（第17図）

29・30は調査区北東側のトレンチ内（第Ⅷ－ｂ上面）から出土した。29は甕形土器の底部片で上げ底を呈する。30は薪と考えられ、表面に焦げ跡が残る。樹種はコウヤマキ。

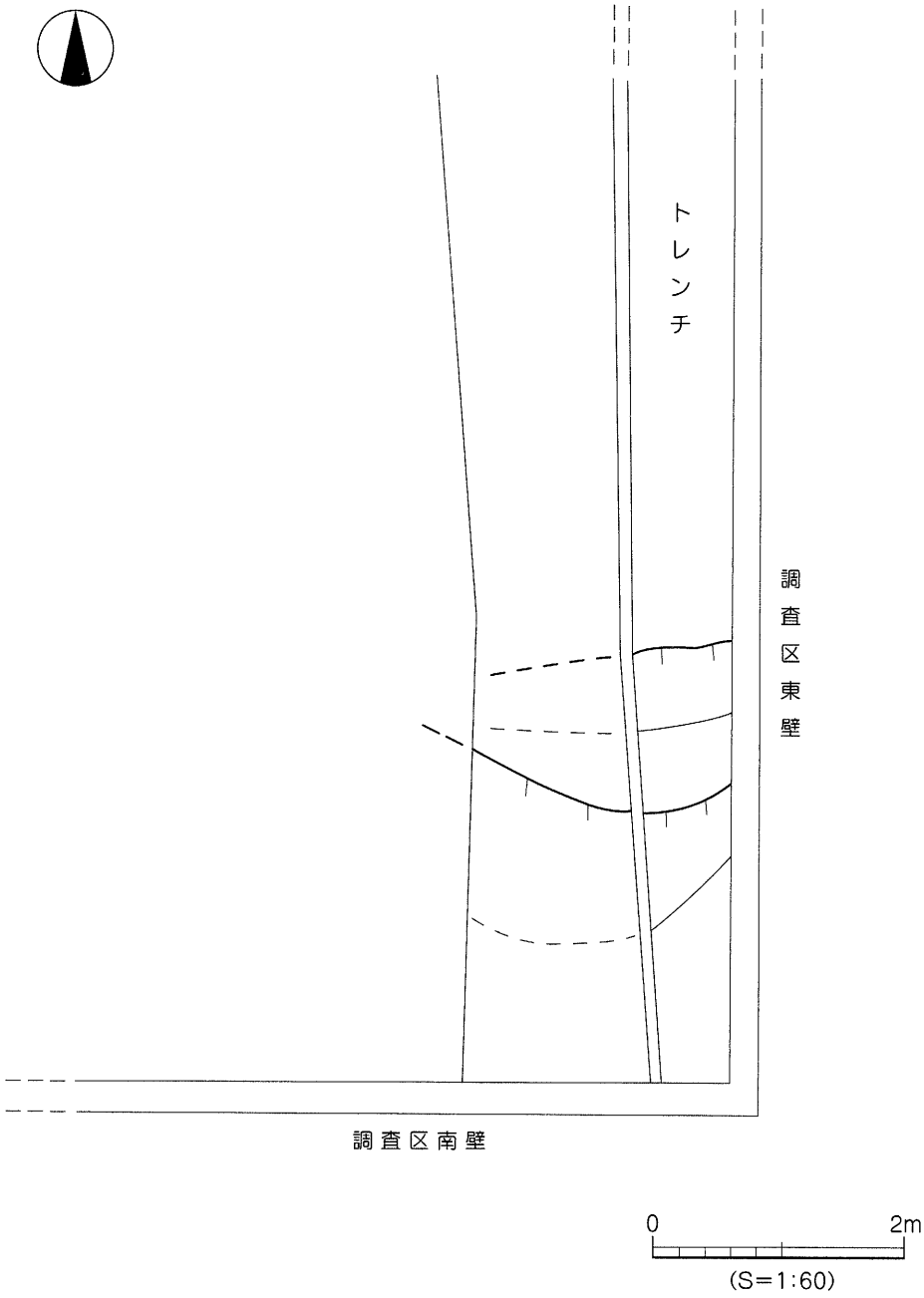
採集遺物（第18～21図）

31～88は第Ⅲ層（客土）中から採集した遺物である。31～33は甕形土器の口頸部片である。31の口縁部は短く外反し、端面はやや肥厚される。32は「く」の字状をなす口頸部片。口縁部の外面はやや厚く仕上げられる。内外面共にハケ目調整痕が残る。34は鉢形土器。外面には多くの煤が付着する。口縁端部はやや拡張され、中央部は僅かに凹む。35～47は底部片。35～38、40は上げ底を呈する。39の外面にはタタキ痕が残る。45～47の外面には指頭圧痕が残る。48～58は壺形土器の口縁頸部片。50～53の頸部には斜格子目突帯、刻み目突帯が貼付される。54～58は複合口縁壺の拡張部片。54・56の拡張部外面には波状文が施される。55は、やや下垂する拡張部外面に円形浮文が貼付される。58の拡張部外面は横ナデにより段をなす。59～67は底部片。62の体部は僅かに段をなし、底部から立ち上がる。外面にタタキ痕を看取。64・67の外面には指頭圧痕が残る。68～72は高坏の坏柱部片。73～77は支脚。73・76は中実で、器高が低く円柱状を呈する。74・75は中



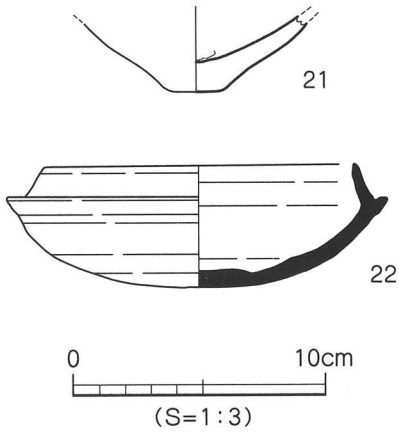


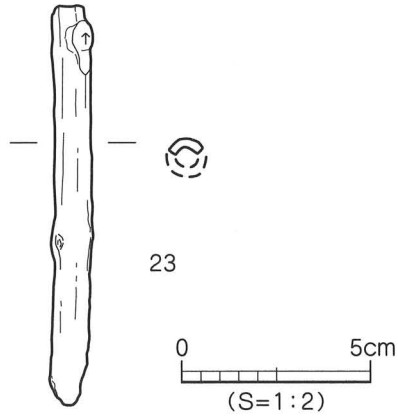
第 13 図　　SD3 測量図・出土遺物実測図

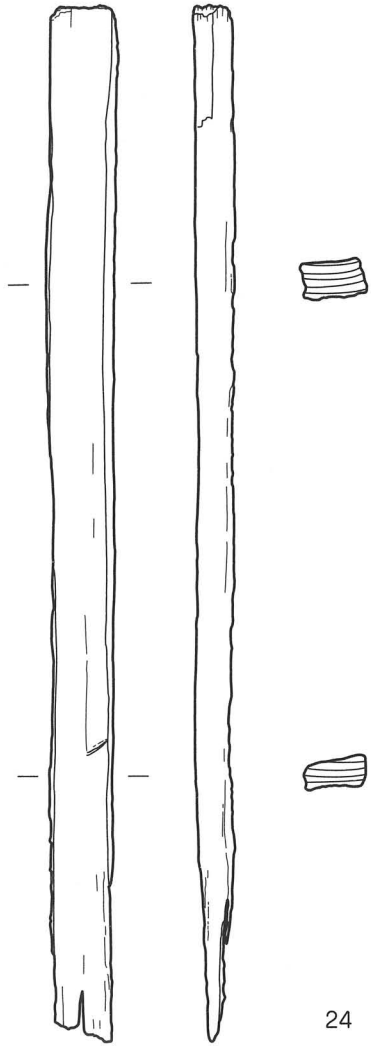


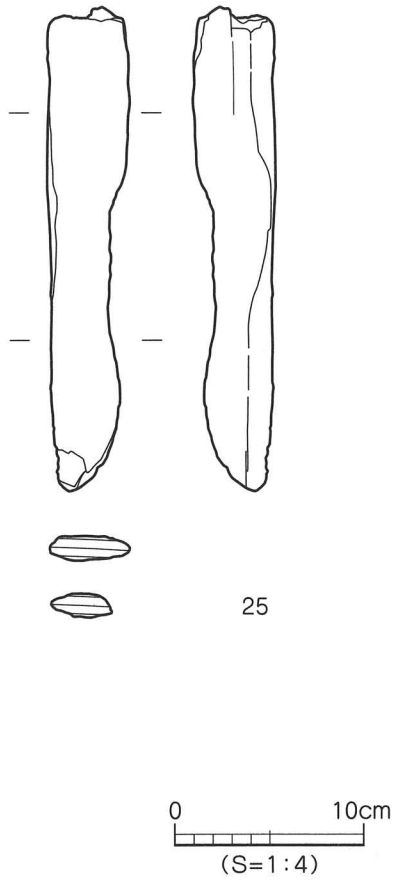
第14図　　SD4測量図

空を呈し、外面にタタキ痕が顕著に残る。77は突起部片。78は甑の把手。79は甑の底部。80は須恵器の坏部片。81は小型の壺形土器。短く立ち上がる拡張部外面にハケ目痕を看取。82は羽釜の受部片。83～85は陶磁器片。85は合子。86は器種不明。外面に格子叩きが施される。87は碧玉製の管玉。約1／3の残存で重さは0.345 gを量る。88は残存約1／2の陶石製砥石。四面に使用痕を看取。重さは76.98gを量る。

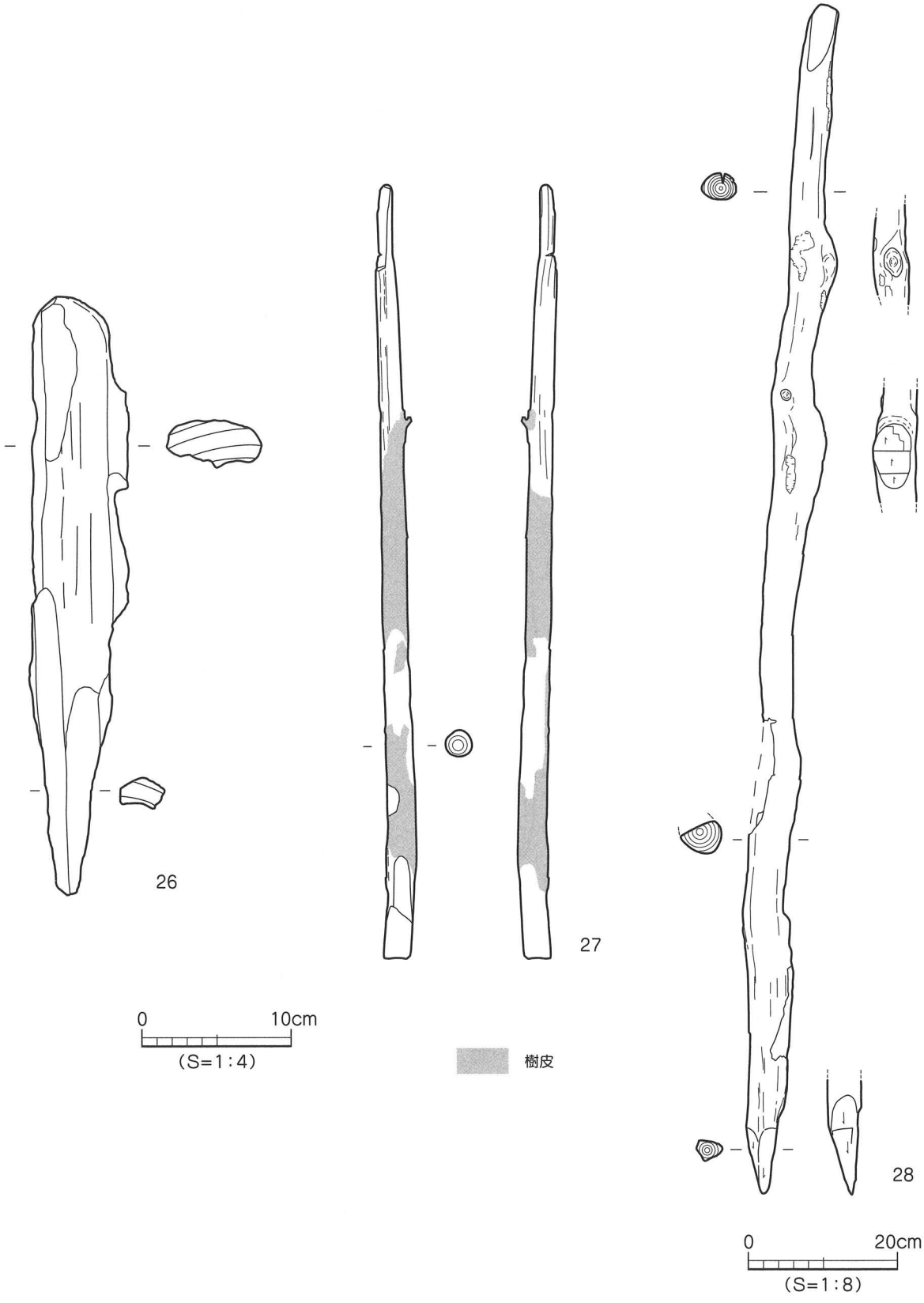




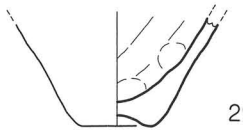




第 15 図　　SD4 出土遺物実測図（1）

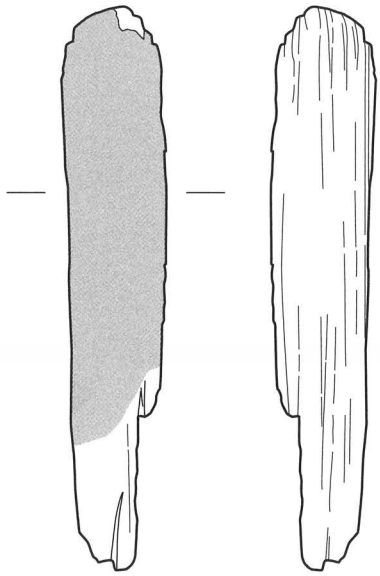


第 16 図　　SD4 出土遺物実測図（2）



29

0 10cm
(S=1:3)

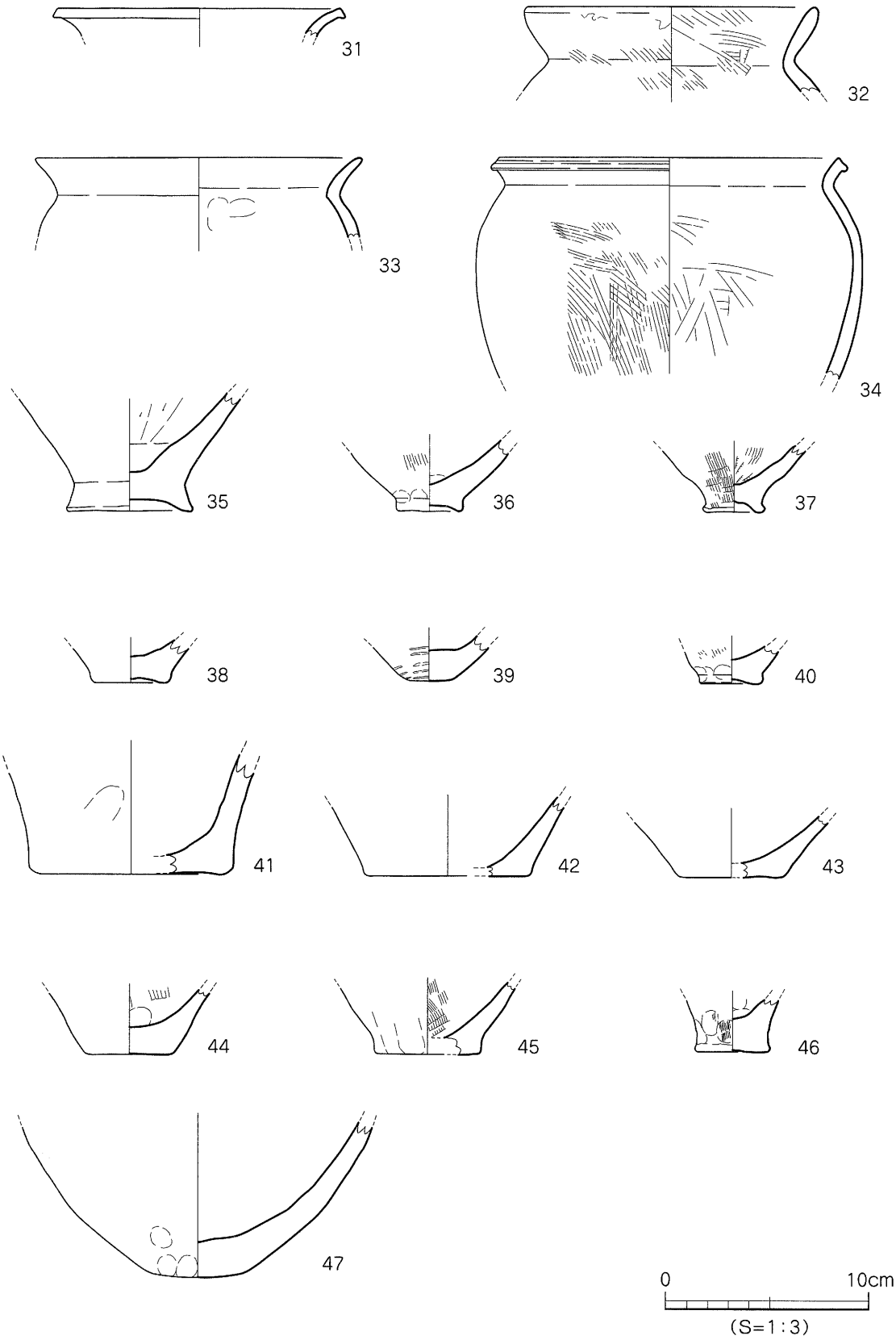


炭化

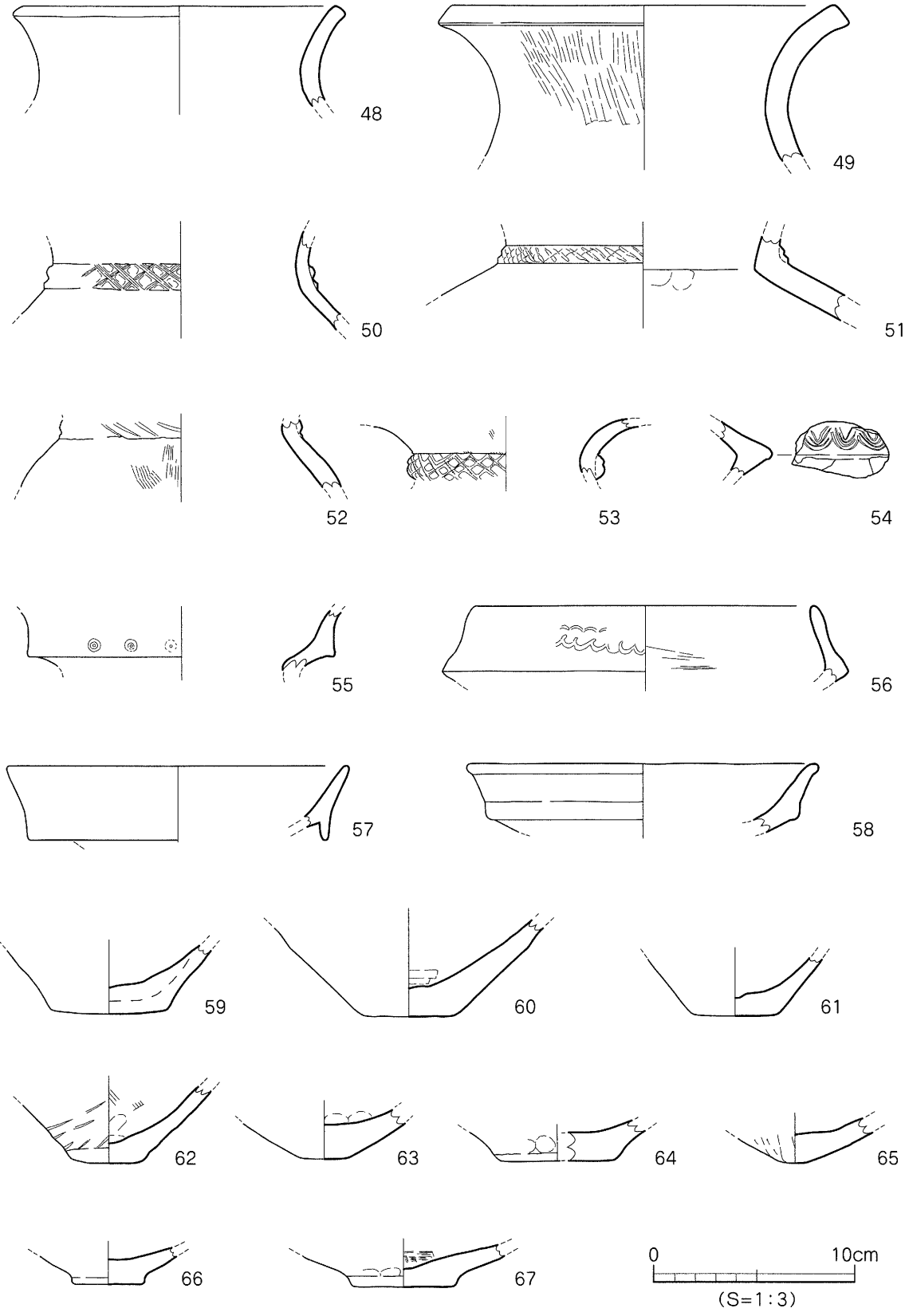
30

0 5cm
(S=1:2)

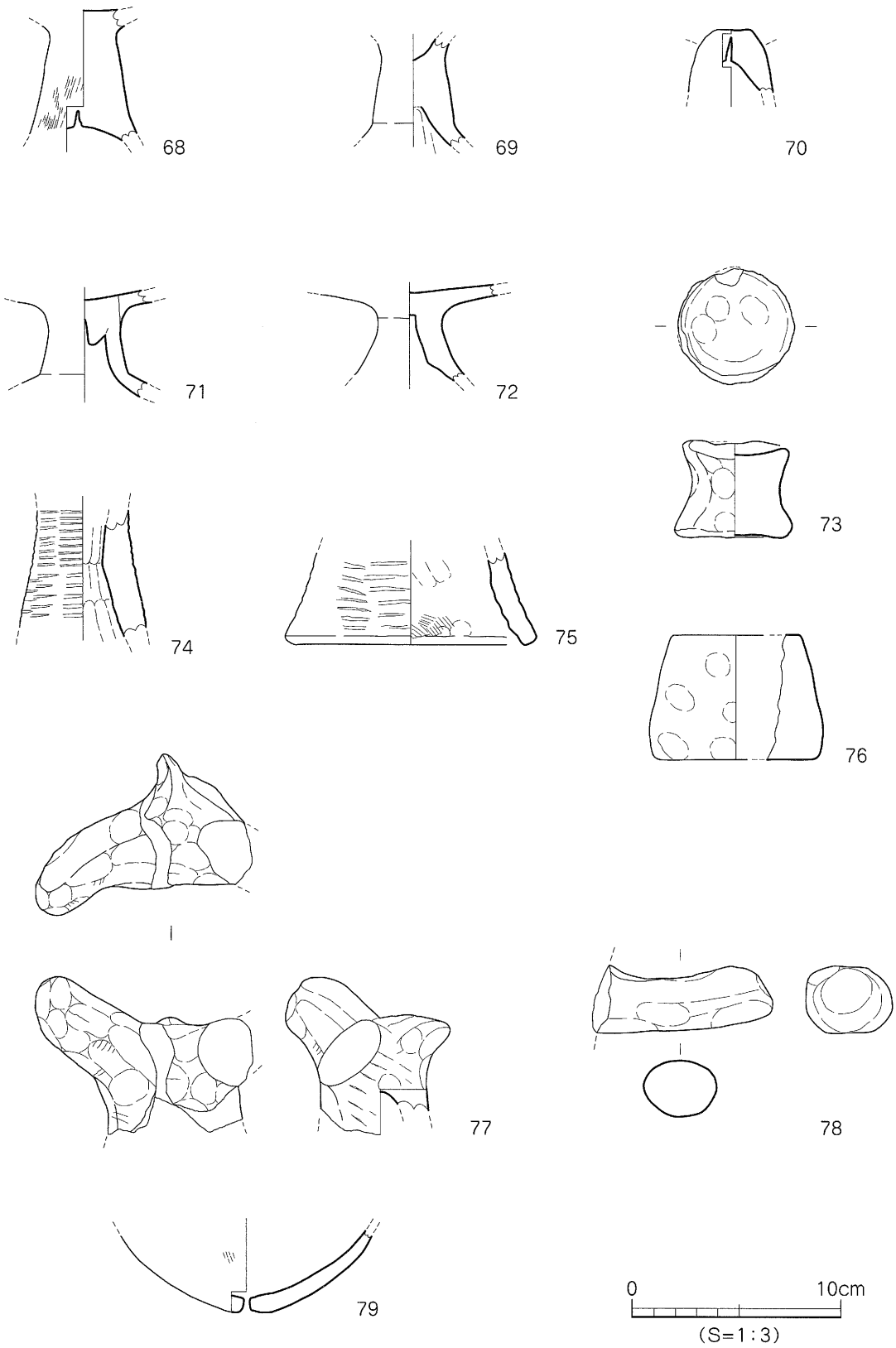
第 17 図　　トレンチ出土遺物実測図



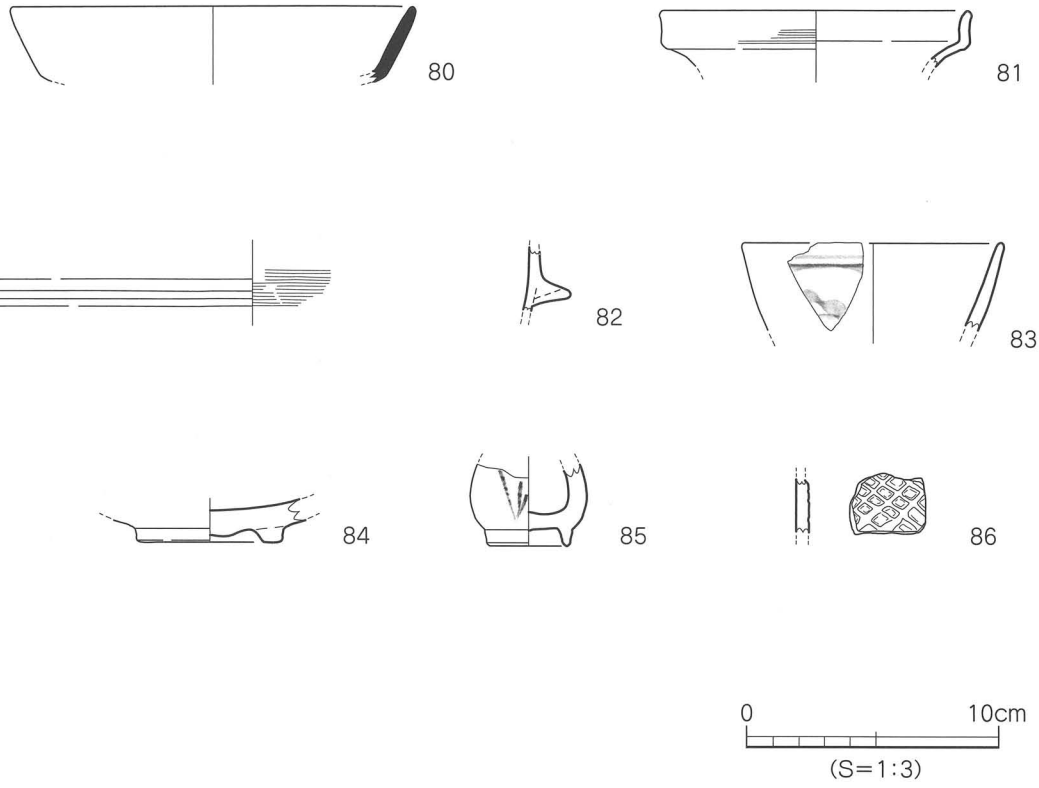
第18図　　採集遺物実測図（1）



第 19 図　　採集遺物実測図（2）



第 20 図　　採集遺物実測図（3）



第 21 図　　採集遺物実測図（4）

第３章　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

古川遺跡は、小野川と内川に挟まれた、標高約 15.5m の沖積低地に位置する。第４次調査では、弥生時代後期の自然流路と溝や古墳時代後期の溝が検出されている。今回の分析調査では、自然流路や溝から出土した木製品や自然木を対象として、古植生や木材利用に関する情報を得ることを目的として、樹種同定を実施する。

１．試料

試料は、木製品や自然木 10 点 (試料番号１～ 10) である。

２．分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995，1996，1997，1998，1999）を参考にする。

３．結果

樹種同定結果を表１に示す。木材は、針葉樹５分類群（モミ属・コウヤマキ・ヒノキ・アスナロ・ヒノキ科）と広葉樹５分類群（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属アカガシ亜属・スダジイ・ヒサカキ・ウツギ属）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・モミ属（*Abies*）　マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で１分野に 1-4 個。放射組織は単列、1-20 細胞高。

表１．樹種同定結果

番号	遺構	層位	時期	器種	木取り	樹種	報告書番号
1	ＳＤ２		弥生後期	板状	板目？	ヒノキ科	19
2	ＳＤ３		弥生後期	板材	板目	ヒノキ	20
3	ＳＤ４		古墳後期	杭	分割材	スダジイ	26
4	ＳＤ４		古墳後期	棒状割材？	分割材	アスナロ	24
5	ＳＤ４		古墳後期	自然木	破片	ウツギ属	23
6	ＳＤ４		古墳後期	自然木	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	27
7	ＳＤ４		古墳後期	板状	板目	モミ属	25
8	ＳＤ４		古墳後期	杭	芯持丸木	ヒサカキ	28
9	ＳＲ１	上層	弥生後期	棒状	芯持丸木	コナラ属アカガシ亜属	3
10	トレンチ			木片	柾目	コウヤマキ	30

・コウヤマキ（*Sciadopitys verticillata*（Thunb.） Sieb. et Zucc.） コウヤマキ科コウヤマキ属

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は窓状となり、通常1分野に1個。放射組織は単列、1-5細胞高。

・ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa*（Sieb. et Zucc.）Endlcher） ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1-3個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・アスナロ（*Thujopsis dolabrata* Sieb. et Zucc.） ヒノキ科アスナロ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、内壁には茶褐色の樹脂が顕著に認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・ヒノキ科（*Cupressaceae*）

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*） ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-4列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*） ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・スダジイ（*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii*（Makino）Nakai） ブナ科シイ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1-2個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高。

・ヒサカキ（*Eurya japonica* Thunberg） ツバキ科ヒサカキ属

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2-3個が複合して散在し、道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、1-4細胞幅、1-40細胞高で、単列のものが多い。

・ウツギ属（*Deutzia*） ユキノシタ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、ほぼ単独で散在する。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1-4細胞幅、40-100細胞高以上のものまである。放射組織には鞘細胞が認められる。

4．考察

弥生時代後期の資料は、ＳＤ２から出土した板状、板材、ＳＲ１の棒状の３点がある。これらの木

取りは、資料写真・実測図から板状・板材が板目、棒状が直径約３㎝の芯持丸木であることが窺える。樹種は、板状・板材は針葉樹が利用されており、板状がヒノキ科、板材がヒノキに同定された。ヒノキ科・ヒノキは、いずれも木理が通直で割裂性・耐水性が高く、分割加工が容易な材質を有することから、板状・板材として適材といえる。一方、棒状は、強度が高い材質を有する常緑広葉樹のアカガシ亜属に同定された。

愛媛県における弥生時代後期の資料では、古照遺跡で板材の同定が行われており、ヒノキが確認されている（株式会社古環境研究所，1996）。また、釜ノ口遺跡の板状を呈する木材がアカガシ亜属に同定されている（株式会社古環境研究所，1997）。矢田八反坪遺跡の板状を呈する用途不明木製品では、アカガシが多く、赤色顔料が塗布された１点のみがヒノキに同定されている（財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター，2000）。一方、棒状を呈する資料では、矢田八反坪遺跡の柄にアカガシやシイ、用途不明の棒状の資料にアカガシ、クヌギ、ツバキが確認されている（財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター，2000）。

古墳時代後期の資料６点は、全てＳＤ４から出土したもので、杭、棒状割材、板状、自然木がある。板状は、針葉樹のモミ属に同定された。モミ属も木理が通直で割裂性が高く、板状の加工が容易であるが、保存性は低いとされる。棒状割材？は、断面が長方形で、広い面が板目となる角棒状を呈し、樹種は針葉樹のアスナロである。アスナロは、ヒノキに似て木理が通直で割裂性・耐水性が高い材質を有しており、分割加工に適材である。杭は２点あり、試料番号３が板目板状の分割材、試料番号８が枝を伐採した痕跡が残る芯持丸木である。樹種は、試料番号３がスダジイ、試料番号がヒサカキに同定された。いずれも常緑広葉樹で、比較的強度が高い材質を有する。スダジイとヒサカキは、暖温帯性常緑広葉樹林（照葉樹林）の構成要素であり、現在でも本地域周辺に分布することから、当時も遺跡周辺に生育していたことが推定される。なお、杭材の木取りの違いは、当時得られた木材の径の違いなどを反映している可能性がある。自然木は、試料番号５が復元直径約１㎝の破片、試料番号６が直径約２㎝の芯持丸木である。樹種は、試料番号５がウツギ属、試料番号６がクヌギ節に同定された。いずれも落葉広葉樹で、河畔等に普通にみられる樹種であることから、周囲に生育していたと推定される。ウツギ属は、大きな個体でも直径４～５㎝程度の低木で、髄が抜けて中空になるのが特徴であるが、出土した資料でも中空の状況が確認できる。一方、クヌギ節は、樹高20mを超える高木になる種類であることから、出土した資料は枝等に由来すると考えられる。

愛媛県における古墳時代中期～後期の資料をみると、船ヶ谷遺跡で板材あるいは板状とされる資料について樹種同定が行われており、針葉樹の複維管束亜属、ヒノキ科、コウヤマキ、広葉樹のクヌギ節、アカガシ亜属、シイ属、クスノキが確認されている（株式会社古環境研究所，2002）。また、矢田八反坪遺跡の板状を呈する用途不明木製品でも針葉樹のヒノキ、コウヤマキが確認されているが、いずれの資料にもモミ属は確認されていない。モミ属は、船ヶ谷遺跡の杭状とされる資料に１点確認された例が見られるのみであり（株式会社古環境研究所，1999）、今回の結果は当該期におけるモミ属の利用状況を考える上で貴重な資料である。

トレンチから出土した木片は、柾目板状を呈しており、何からの加工材と考えられるが、時期や用途は不明である。コウヤマキは、木理が通直で割裂性・耐水性が高く、分割加工に適した木材が利用されている。なお、愛媛県内でのコウヤマキの出土事例は、これまでに11例が知られている。古照遺跡の古墳前期とされる堰部材（山本，1974）、矢田八反坪遺跡の古墳時代中期～後期の用途不明

木製品（財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター，2000）、船ヶ谷遺跡の古墳時代中期～後期の板材、板状、杭２点（株式会社古環境研究所，2002）、葉佐池古墳の６世紀とされる木棺（光谷，2003）、桑原遺跡の弥生時代中期～古墳時代後期の木材や杭など３点（株式会社古環境研究所，2004，2005a）、久枝Ⅱ遺跡の古代とされる木材（2005）であり、古墳時代の資料が多い。

〔引用文献〕

林　昭三，1991，日本産木材　顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所．

伊東　隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，81-181.

伊東　隆夫，1996，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料，32，京都大学木質科学研究所，66-176.

伊東　隆夫，1997，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料，33，京都大学木質科学研究所，83-201.

伊東　隆夫，1998，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料，34，京都大学木質科学研究所，30-166.

伊東　隆夫，1999，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料，35，京都大学木質科学研究所，47-216.

株式会社古環境研究所，1996，樹種同定（1）・（2）．「古照遺跡－第８・９次調査－（第２分冊）」，松山市文化財調査報告書第53集，松山市教育委員会・財団法人生涯学習振興財団埋蔵文化財センター，63-73.

株式会社古環境研究所，1997，釜の口遺跡８次調査から出土した木材の樹種同定.「釜ノ口遺跡Ⅱ　－６・７・８次調査－」，松山市文化財調査報告書第60集，松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター，174-180.

株式会社古環境研究所，1999，船ヶ谷遺跡２次調査出土木材の樹種同定.「船ヶ谷遺跡２次調査」，松山市文化財調査報告書第70集，松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター，81-83.

株式会社古環境研究所，2002，船ヶ谷遺跡４次調査における樹種同定.「船ヶ谷遺跡４次調査　遺構・遺物編」，松山市文化財調査報告書第88集，松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター，215-224.

株式会社古環境研究所，2004，自然科学分析.「桑原遺跡5次調査地」，松山市文化財調査報告書第99集，松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習財団埋蔵文化財センター，49-57.

株式会社古環境研究所，2005a，桑原遺跡4次調査4区における樹種同定.「東本遺跡６次調査地・桑原遺跡２次調査地・桑原遺跡４次調査地　松山市道中村桑原線関連遺跡」，松山市文化財調査報告第105集，松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター，234-240.

株式会社古環境研究所，2005b，久枝II遺跡における樹種同定（2001年度分析）.「久枝遺跡・久枝Ⅱ遺跡・本郷Ⅰ遺跡一般国道196号今治小松道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書第３集　自然科学分析・考察編」，財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター，686-698.

光谷　拓実，2003，木棺の樹種と年輪年代学的検討.「葉佐池古墳」，松山市文化財調査報告書第92集，松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター，178-179.

Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E.（編），2006，針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東　隆夫・藤井　智之・佐野　雄三・安部　久・内海　泰弘（日本語版監修），海青社，70p.［Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E.（2004）IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.

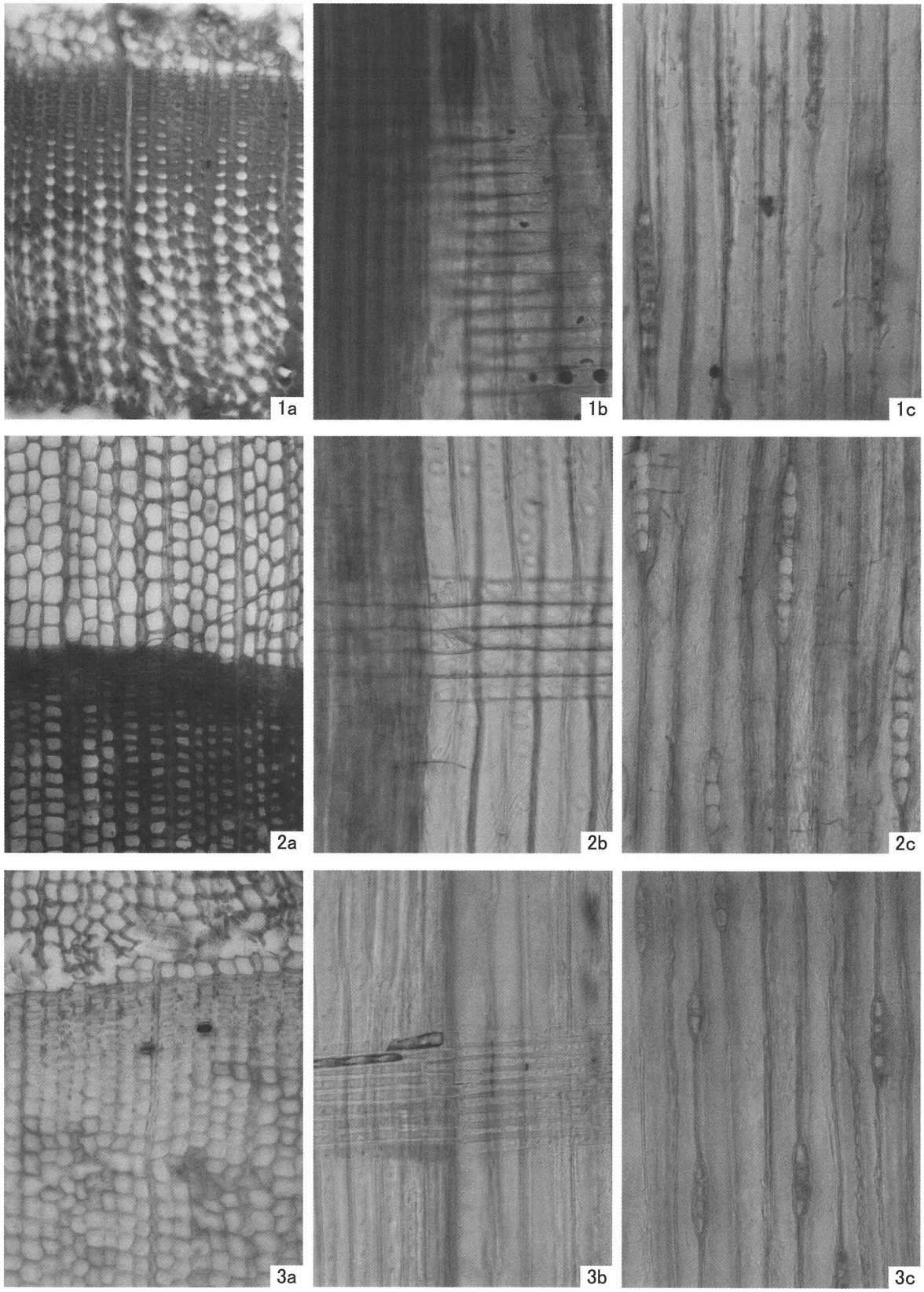
島地　謙・伊東　隆夫，1982，図説木材組織．地球社，176p.

Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E.（編），1998，広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東　隆夫・藤井　智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社，122p.［Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E.（1989）IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

山本　四郎，1974，使用材とその植生．「古照遺跡」，松山市文化財調査報告書４集，松山市教育委員会・古照遺跡調査本部，72-74.

財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター，2000，阿方遺跡　矢田八反坪遺跡　来島海峡大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告書第６集．埋蔵文化財発掘調査報告書第84集，448p.

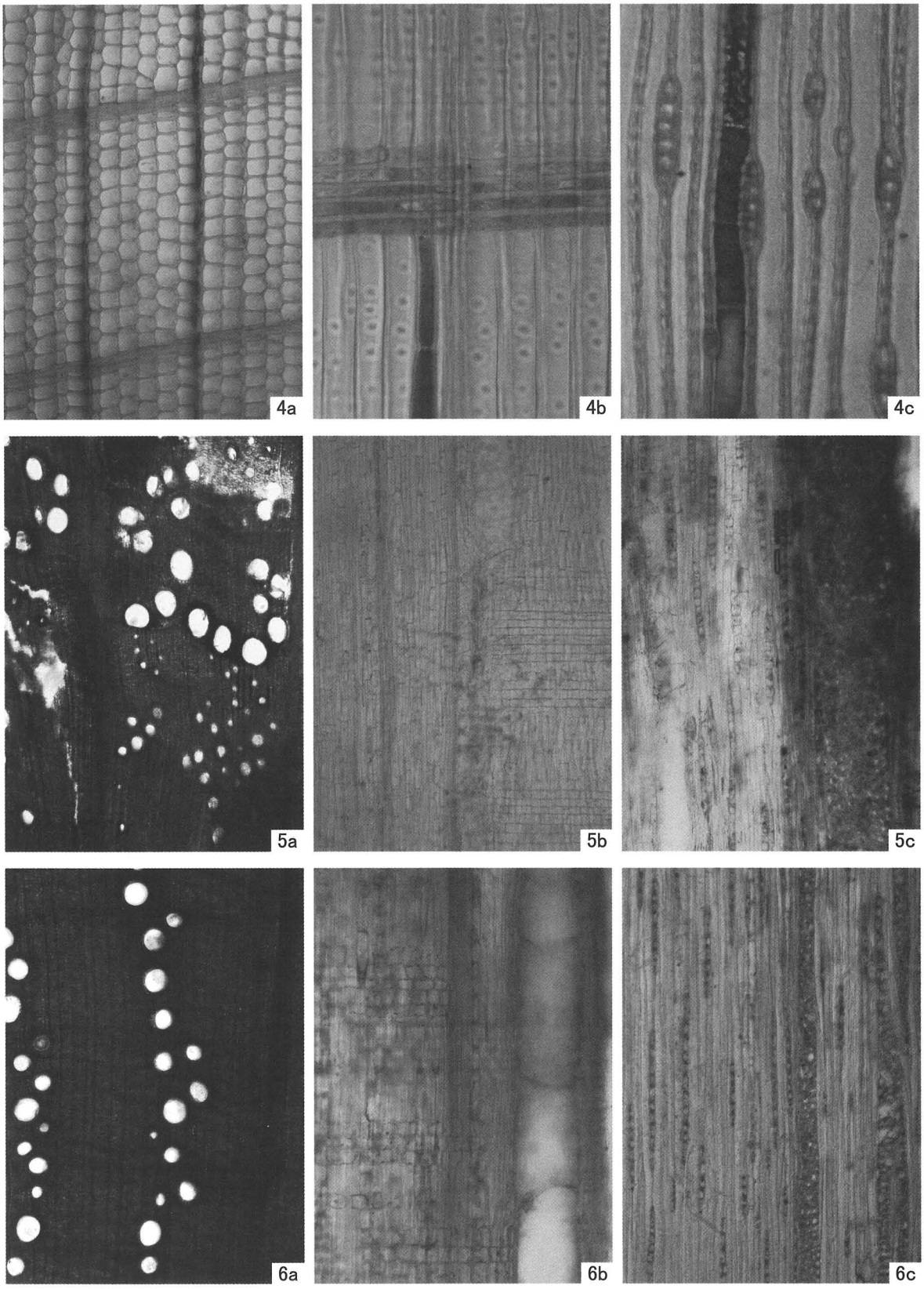
図版1 木材(1)



1.モミ属(試料番号7)
2.コウヤマキ(試料番号10)
3.ヒノキ(試料番号2)
a:木口, b:柾目, c:板目

200 μ m:a
100 μ m:b,c

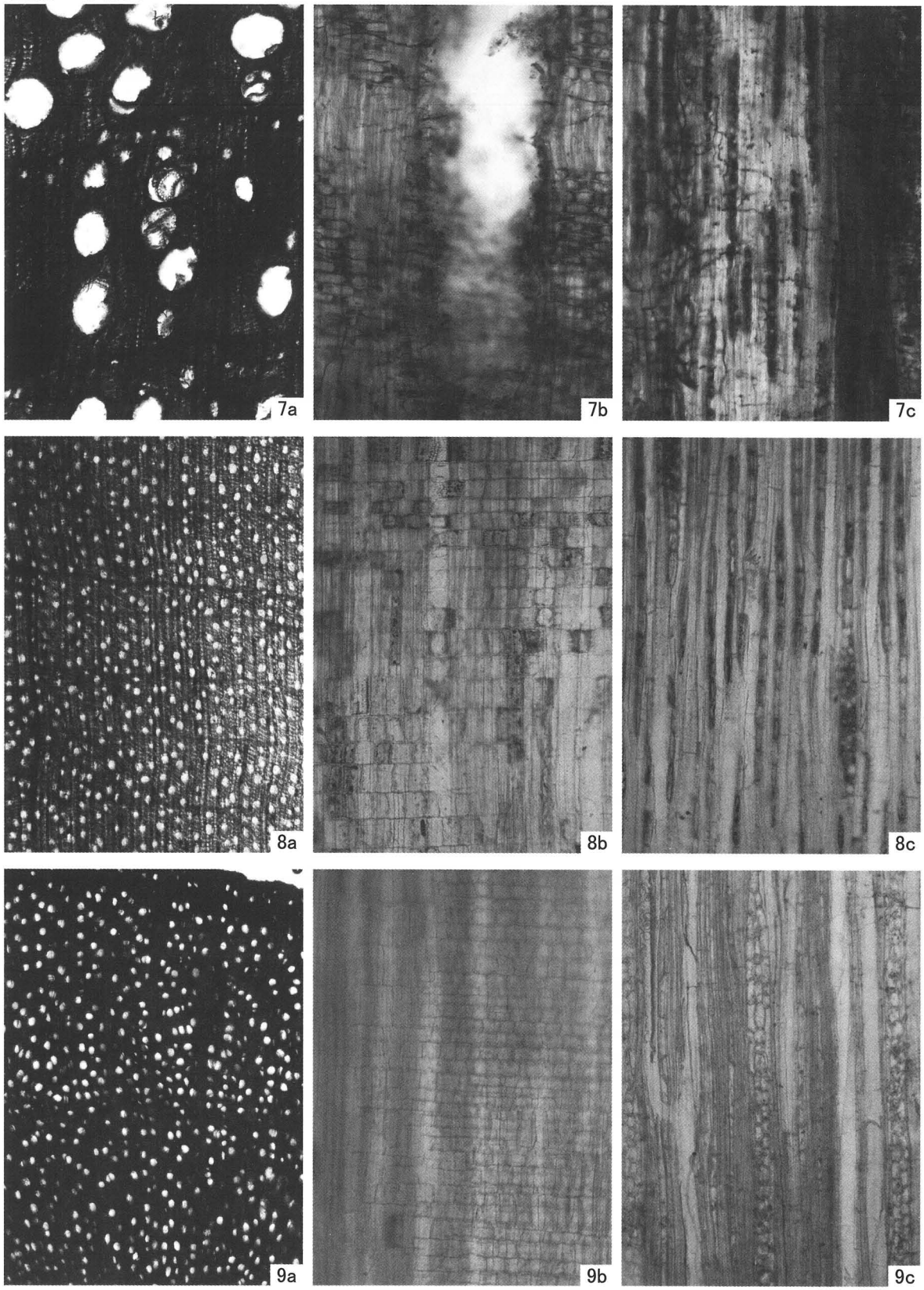
図版2　木材(2)



4.アスナロ(試料番号4)
5.コナラ属コナラ亜属クヌギ節(試料番号6)
6.コナラ属アカガシ亜属(試料番号9)
a:木口, b:柾目, c:板目

300 μ m:5-6a
200 μ m:4a,5-6b,c
100 μ m:4b,c

図版3 木材(3)



7.スダジイ(試料番号3)
8.ヒサカキ(試料番号8)
9.ウツギ属(試料番号5)
a:木口, b:柾目, c:板目

第４章　まとめ

今回の調査では、流水及び淀みによる土壌を確認した。調査地の東側に位置する西石井遺跡１次調査地と西側の古川遺跡１次調査地では黄色土が安定して堆積しており、上面で弥生時代から古代までの遺構、特に溝・河川が見つかっている。本調査地は二つの遺跡の間を北東から南西方向に流れる河川の影響を受けていると考えられる。なお東方50ｍに位置する古川遺跡３次調査では淀み或いは池の可能性が考えられる土壌や護岸施設に使用された可能性も考えられる木杭が検出されている。以下、遺構別に若干のまとめを記す。

調査では、弥生時代後期の自然流路１条（ＳＲ１）、弥生時代後期の溝２条（ＳＤ２・３）、古墳時代後期の溝１条（ＳＤ４）を検出した。

ＳＲ１　土層観察及び溝底の高低差から、水は北東から南西へ緩やかに流れていたものと思われる。出土遺物及び溝底に粘土層が堆積していることから弥生時代後期頃までには流れが弱くなっていたものと考えられる。

ＳＤ２　北東から南西に掘削された溝で、溝下位に砂利層が堆積していることから一時期、流水があったものと考えられる。溝下位からは弥生時代後期の土器片が出土した。また、溝上位には黒色粘土層が溜まり、木片や植物の種子が出土している。種子は瓜系と桃系の二種類と考えられる。

ＳＤ３　溝の中に溜まった土層と出土遺物がＳＤ２と似ていることから、同時期に存在したものと考えられる。

ＳＤ４　出土品から古墳時代後期（６世紀後半）までは機能していたものと考えられる。また、溝底付近からは木片が検出され、一部加工材（木杭）も含まれる。

以上のことから、本調査地は集落域ではなく、生産域に近い様相を呈しているものと考えられる。なお、北東方に位置する東石井遺跡・西石井遺跡（１～３次調査）では弥生時代中期から中近世にいたる石井地区の集落構造が明らかとなり、特に弥生時代では黄灰色土や暗灰色土、黄褐色土などの堆積層が集落形成に大きく影響していることが判明している。さらに「№119 西石井遺物包含地」の内外を含めてこの地区における発掘調査事例が少ない要因にこれらの層位が関係している可能性が高いとの指摘もある（宮内　2006）。また、発掘調査中に市民の方から本調査地北側（北側道路部分）は、その昔、這って上がらなければ登れない程、高かったとのご教示も受けた。

今後の課題は、上記の指摘・ご教示を踏まえ、試掘・本格調査の更なる精度向上を計ると共に、弥生時代のみならず他の時代・時期の集落様相を解明し、遺跡の広がりを把握するための旧地形復元を行わなければならないと考える。

最後に、発掘調査及び報告書刊行にあたり、松山市保健福祉部子育て支援課、古川町内会の方々には多大なご理解、ご協力を賜り、記して感謝申し上げます。

宮内　慎一　2006「第８章　調査の成果と課題」『東石井遺跡・西石井遺跡－１・２・３次調査地－』
松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

遺構・遺物一覧　－凡例－

（1）以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

遺構一覧は武正良浩、遺物観察表は武正、多知川富美子、木下奈緒美が作成した。

（2）遺物観察表の各掲載について。

法　量　欄　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。

例）口→口縁部、口端→口端部、口上→口縁上部、口下→口縁下部

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）微砂→微砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1～3）→「1～3㎜の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表2．出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	壺	残高 13.0	外傾して立ち上がる体部片。	ナデ	ケズリ→ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長(1～4) ◎		10
2	壺	口径 (9.7) 残高 5.7	外反気味に立ち上がる口縁部片。頸部に沈線を施す。	ハケ→ナデ	ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長(1～3) 金 ◎		10
4	甕	口径 (18.2) 残高 4.0	外傾して立ち上がる口縁部片。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 灰黄色	長(1～4) ○		
5	壺	残高 2.4	口唇端面に刻み目。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1～2) ◎		10
6	壺	口径 (21.2) 残高 2.8	円形浮文。	マメツ	マメツ	灰黄色 灰黄色	石・長(1～2) ◎		10
7	壺	残高 3.7	複合口縁の屈折部外面に刻み目が施される。	ナデ	ナデ	浅黄色 浅黄色	石・長(1～2) ◎		
8	壺	残高 5.0	やや外反して立ち上がる頸部片。	マメツ	マメツ	灰黄色 灰黄色	石・長(1～2) ◎		
9	壺	口径 (12.6) 残高 2.9	口縁端面はナデにより拡張される。	マメツ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ◎		
10	鉢	口径 (26.6) 残高 9.0	口縁端部はやや拡張される。	[口]ナデ ハケ(5本/cm)	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	長(1～3) ◎		10
11	鉢	口径 (23.0) 残高 5.8	短く外反する口縁部。	[口]ナデ ハケ(5本/cm)	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄褐色	長(1) 金 ◎	煤付着	10
12	鉢	口径 (14.8) 残高 4.1	短く外反する口縁部。内側はやや肥厚される。	ナデ	[口端]ナデ ハケ	灰黄色 灰黄色	石・長(1) ◎		
13	甕	底径 (7.0) 残高 2.5	平底。	マメツ	マメツ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1～2) ○		
14	甕	底径 3.0 残高 3.9	平底の底部片。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
15	鉢	底径 1.2 残高 2.8	体部は、狭小な平底から内湾して立ち上がる。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 黒色	長(1) ◎		
16	甕	底径 (4.0) 残高 4.7	平底の底部片。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 橙色	石・長(1～2) ◎		
17	高坏	残高 3.5	坏柱部片。	ナデ	ナデ (指頭痕)	浅黄色 浅黄色	石・長(1～2) ◎		
18	支脚	口径 (9.2) 残高 5.2	口唇端面に刻み目。	マメツ	ナデ (絞り痕・指頭痕)	橙・にぶい黄橙色 橙色	長(1) ◎		10

表2．出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
21	鉢	底径 2.4 残高 3.0	底部片。体部は内湾して立ち上がる。	ナデ	ナデ	灰黄色 灰黄色	長(1) ◎		
22	坏	口径 12.3 底径 3.1 器高 4.9	受部はやや上向きに外方へ延びる。	回転ナデ	[口]回転ナデ 回転ヘラ削り	灰 灰	長(1~4) ◎		10
29	甕	底径 (2.8) 残高 4.3	上げ底の底部片。	ナデ	ナデ(指頭痕)	灰黄色 灰黄色	石・長(1) ◎		
31	甕	口径 (14.3) 残高 1.4	口唇端面はやや下方に拡張される。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ◎		
32	甕	口径 (14.4) 残高 4.2	内湾気味に立ち上がる口縁部片。	[口端]マメツ ハケ(5本/cm)	ハケ(5本/cm)	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ◎		
33	甕	口径 (16.0) 残高 3.9	短く外反気味に立ち上がる口縁部。	マメツ	ナデ	浅黄橙色 黄灰色	長(1) ◎		
34	鉢	口径 (17.4) 残高 10.9	口唇端面は下方に拡張される。	[口端]ヨコナデ ハケ(5本/cm)	ナデ(工具痕)	灰色 灰色	石・長(1) 金 ◎	煤付着	
35	甕	底径 (6.2) 残高 5.8	くびれて上げ底となる底部片。	マメツ	ケズリ→ナデ	明赤褐色 黒色	長(1~4)多 ◎		
36	壺	底径 (3.2) 残高 3.5	弱い上げ底を呈する。	[底]ナデ ハケ(7本/cm)	ナデ	明赤褐色 にぶい黄色	長(1~2) ◎		
37	甕	底径 (3.0) 残高 3.3	上げ底の底部片。	ハケ(10本/cm) [底]ナデ	ハケ(8本/cm)	黒褐色 暗灰黄色	石・長(1~2) ◎	黒斑	
38	甕	底径 (3.4) 残高 2.1	弱い上げ底を呈する。	マメツ [底]ナデ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1~3) ◎		
39	甕	底径 2.0 残高 2.2	狭小な平底。外面にタタキ痕。	タタキ [底]ナデ	マメツ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1~5) ◎		
40	甕	底径 3.1 残高 1.8	くびれて上げ底となる底部片。 外面に指頭圧痕。	ハケ(8本/cm)→ナデ (指頭痕)	ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長(1~5) ◎		
41	甕	底径 (10.0) 残高 5.8	平底の底部片。	ナデ	ナデ	明黄褐・黒褐色 明黄褐・黒褐色	石・長(1~2) 金 ◎		
42	甕	底径 (8.2) 残高 3.9	平底の底部片。	マメツ	マメツ	灰黄色 灰黄色	石・長(1~2) ◎		
43	甕	底径 (5.0) 残高 3.0	平底の底部片。	マメツ [底]ナデ	マメツ	にぶい黄橙色 褐灰色	石・長(1~2) ◎		
44	甕	底径 (4.4) 残高 3.2	平底の底部片。	ナデ	ハケ(6本/cm)→ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長(1~2) 金 ◎		
45	甕	底径 (5.2) 残高 3.6	平底の底部片。	マメツ	ハケ(8本/cm)	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ◎		
46	甕	底径 (3.7) 残高 2.6	平底の底部片。	ハケ→ナデ(指頭痕) [底]ナデ(板圧痕)	ナデ(指頭痕)	浅黄色 黒褐色	石・長(1) 金 ◎	黒斑	
47	甕	底径 (4.6) 残高 7.6	平底の底部片。	ナデ(指頭痕)	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~5) ◎	黒斑	
48	壺	口径 (16.4) 残高 5.0	短く外反する口縁部片。	マメツ	マメツ	灰黄色 灰黄色	石・長(1~2) 金 ◎		
49	壺	口径 (20.3) 残高 7.7	外反する口縁部片。	[口端]ヨコナデ ハケ(5本/cm)	ナデ	にぶい黄橙色 橙色	石・長(1~2) 金 ◎		
50	壺	残高 5.1	斜格子目突帯貼付の頸部片。	[頸]ナデ マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 灰白色	石・長(1~2) ◎		
51	壺	残高 4.2	斜格子目突帯貼付の頸部片。	マメツ	ナデ	淡黄色 淡黄色	石・長(1~2) ◎		
52	壺	残高 3.4	刻み目突帯貼付の頸部片。	ハケ(7本/cm)→ナデ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		
53	壺	残高 3.0	斜格子目突帯貼付の頸部片。	ハケ→ナデ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1) ◎		

表2．出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
54	壺	残高 2.6	複合口縁の屈折部外面上部に波状文が施される。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 にぶい橙色	石・長(1~2) ◎		
55	壺	残高 3.0	拡張部外面に円形浮文。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 橙色	石・長(1~2) 金 ◎		
56	壺	口径 (16.6) 残高 3.8	複合口縁拡張部外面上部に波状文が施される。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ◎		
57	壺	口径 (17.0) 残高 3.7	下方へ拡張される口縁部片。	マメツ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~2) 金 ◎		
58	壺	口径 (17.5) 残高 3.4	外傾する拡張部。	ナデ	ナデ	にぶい黄色 にぶい黄色	石・長(1) ◎		
59	壺	底径 (5.8) 残高 3.4	平底の底部片。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎	黒斑	
60	壺	底径 (4.4) 残高 4.8	平底の底部片。	マメツ	ナデ(工具痕)	灰黄・黄灰色 灰黄・黄灰色	石・長(1~4) ◎	黒斑	
61	甕	底径 (4.2) 残高 2.8	平底の底部片。	マメツ	マメツ	橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~2) ◎		
62	甕	底径 3.7 残高 3.8	平底の底部片。	タタキ [底]ナデ	ハケ(8本/cm) [底]ナデ	にぶい橙色 褐灰色	石・長(1~2) ◎		
63	壺	底径 (1.8) 残高 2.4	平底の底部片。	ナデ	ナデ	黒色 灰黄色	石・長(1~4) ◎	黒斑	
64	壺	底径 (5.8) 残高 2.0	平底の底部片。	ナデ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ◎	黒斑	
65	壺	底径 1.0 残高 2.2	狭小な平底。	ケズリ→ナデ	ナデ	黒褐色 褐灰色	長(微砂粒) ◎		
66	壺	底径 (3.6) 残高 1.8	平底の底部片。	ナデ	マメツ	淡黄色 灰黄色	石・長(1~2) ◎		
67	壺	底径 (5.0) 残高 2.1	平底の底部片。	ナデ(指頭痕)	ハケ	黒色 灰黄色	石・長(1~4) ◎		
68	高坏	残高 6.2	脚部片。	ハケ(10本/cm)→ナデ	マメツ	灰黄・灰白色 灰黄・灰白色	石・長(1~2) ◎		
69	高坏	残高 5.2	脚部片。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~2) 金 ◎		
70	高坏	残高 3.0	脚部片。	マメツ	ナデ	明褐色 橙色	石粒(1) ◎		
71	高坏	残高 5.1	坏柱部片。	マメツ	ナデ	にぶい橙色 にぶい褐色	石・長(1~2) ◎		
72	高坏	残高 4.6	坏柱部片。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1~5) ◎		
73	支脚	受部径 5.1 器高 4.6 底径 5.6	完形品。中実。	ナデ(指頭痕)	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~4) ◎		
74	支脚	残高 5.6	柱部片。	タタキ	ナデ(しぼり痕)	黄灰色 黄灰色	石・長(1~2) ◎		
75	支脚	底径 (12.0) 残高 4.4	裾部片。	タタキ	ハケ(8本/cm)→ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ◎		
76	支脚	受部径(6.0) 底径 (7.8) 器高 6.0	外面に指頭圧痕看取。中実。	ナデ(指頭痕)	剥離	橙色 橙色	石・長(1~4) ◎		
77	支脚	残高 7.6	角状突起3ヶ所。2/3残存。	ナデ(指頭痕)	ナデ(指頭痕)	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1~5) ◎		
78	甑	残高 2.2	把手部。	ナデ(指頭痕)	ナデ(指頭痕)	にぶい黄橙色	石・長(1~5) ◎		
79	甑	底径 2.4 残高 3.9	焼成前穿孔	ハケ(6本/cm)→ナデ	ナデ	橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) ◎		

表2．出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
80	坏	口径 (16.0) 残高 3.0	直線的に立ち上がる口縁部。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
81	壺	口径 (12.4) 残高 2.2	拡張部は短く外反する。	ハケ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ◎		
82	羽釜	残高 2.5	水平な受部片。	[口]ヨコナデ ナデ	ハケ(10本/cm)	灰色 灰色	微砂粒 ◎		
83	椀	口径 (10.4) 残高 3.5	陶磁器片。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	密 ◎	施釉	
84	椀	底径 (5.8) 残高 2.2	陶磁器片。	回転ヨコナデ [底]削り	回転ヨコナデ	にぶい橙色 灰白色	密 ◎	施釉	
85	合子	底径 (3.3) 残高 3.2	染付。	[底]回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	施釉	
86	不明	残高 2.1	格子タタキ痕。	ナデ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ◎		

表3．出土遺物観察表　玉製品・石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
87	管玉	1/3	碧玉	0.88	0.6	径0.6	0.345		10
88	砥石	1/2	陶石	6.9	4.7	1.20	76.98		10

表4．出土遺物観察表　木材（木製品）

番号	器種	残存状態	樹種	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
3	棒状	欠損	コナラ属 アカガシ亜属	28.0	3.1	3.0	(3.0)	炭化	
19	板状	欠損	ヒノキ科	24.2	5.7	0.8			
20	板材	欠損	ヒノキ	34.6	5.0	0.8			
23	自然木	欠損	ウツギ属	10.6	1.1	0.2	(1.0)		
24	棒状割材	欠損	アスナロ	54.7	3.6	2.0			
25	板状	欠損	モミ属	25.6	4.3	1.3			
26	杭	欠損	スダジイ	40.0	6.5	3.6			
27	自然木	欠損	コナラ属コナラ亜属 クヌギ節	51.7	1.8	1.8	(1.8)		
28	杭	欠損	ヒサカキ	157.8	7.0	3.5	(4.6)		
30	薪	欠損	コウヤマキ	14.9	2.6	0.8		炭化	

写　真　図　版

古川遺跡４次調査

写真図版例言

1．遺構は、主な状況については、４×５判や６×７判の白黒ネガフィルム・カラリバーサルフィルムで撮影し、35㎜判デジタルカメラで補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパーアンギュロン	90㎜他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67	55㎜他
	ニコンニューＦＭ２		ズームニッコール	28～85㎜他
	キャノンパワーショットＳ２			
フィルム	白　黒　ネオパンSS・アクロス			

2．遺物は、４×５判で撮影した。

使用機材：

カメラ	トヨビュー45G
レンズ	ジンマーＳ　240ｍｍ　Ｆ5.6他
ストロボ	コメット／ＣＡ32・ＣＢ2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	白　黒　ネオパンアクロス

3．単色図版は、一部を除き、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸器	ラッキー450ＭＤ・90ＭＳ
レンズ	エル・ニッコール135㎜　Ｆ5.6・50㎜ Ｆ2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードⅣ　ＲＣペーパー

4．製　版　　写真図版175線

印　刷　　オフセット印刷

用　紙　　マットコート110kg

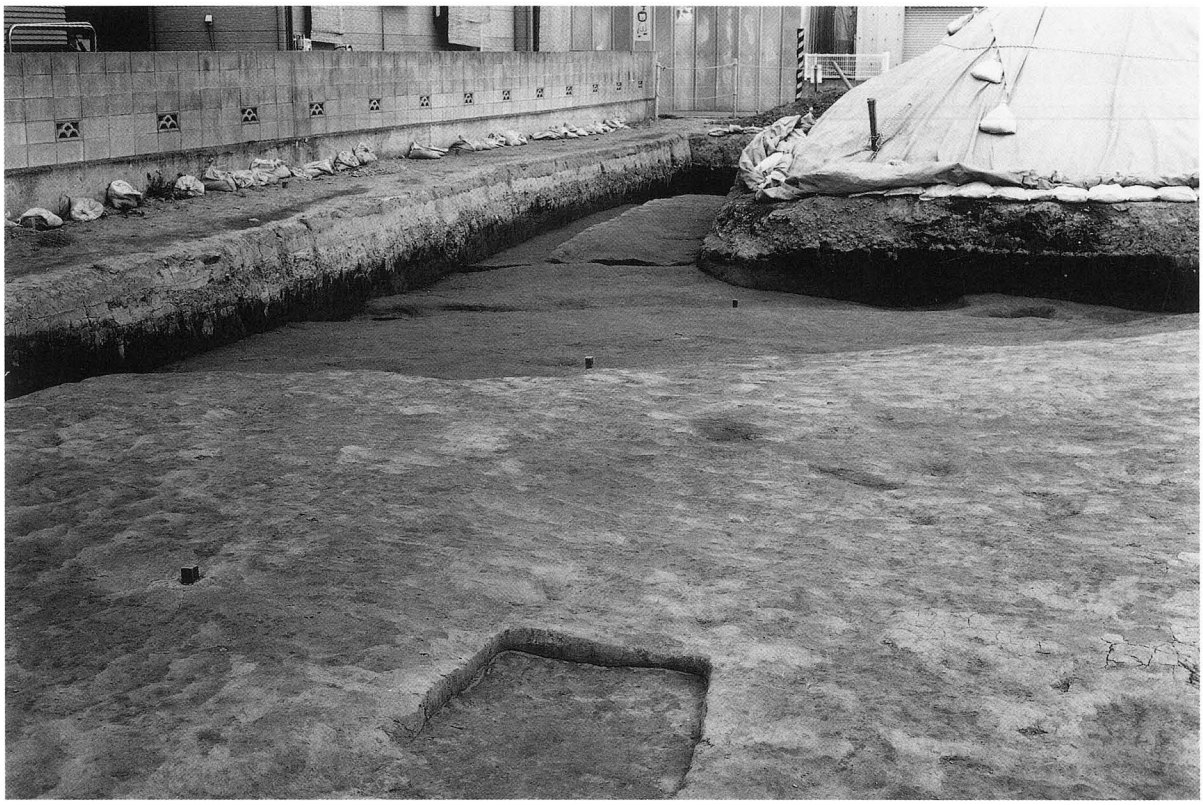
【参考】『埋文写真研究』vol.１～20『報告書制作ガイド』　　［大西朋子］

1．調査前風景（南西より）

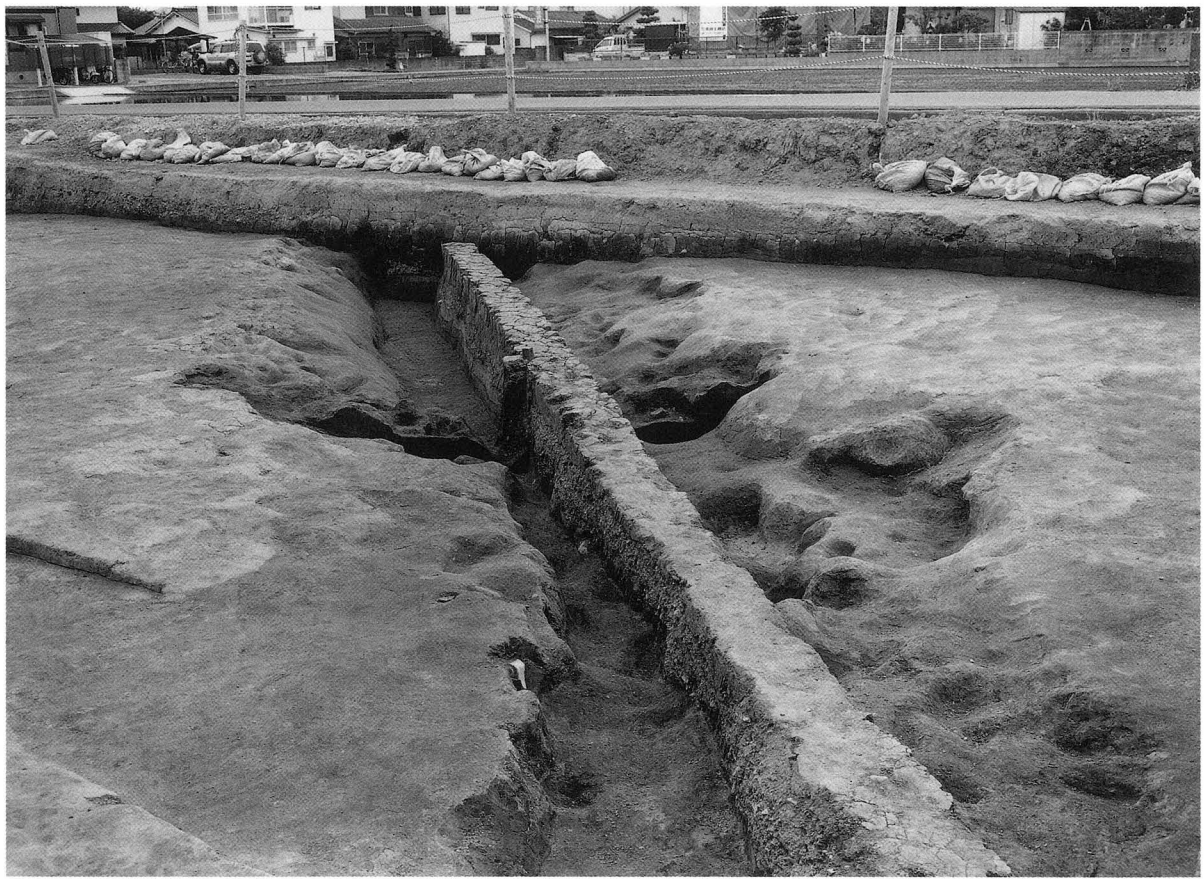
2．調査区南側客土除去状況（北より）

1．調査区北側遺構検出状況（北より）

2．SR１内遺物出土状況（北西より）



1．SR1 完掘状況（北より）

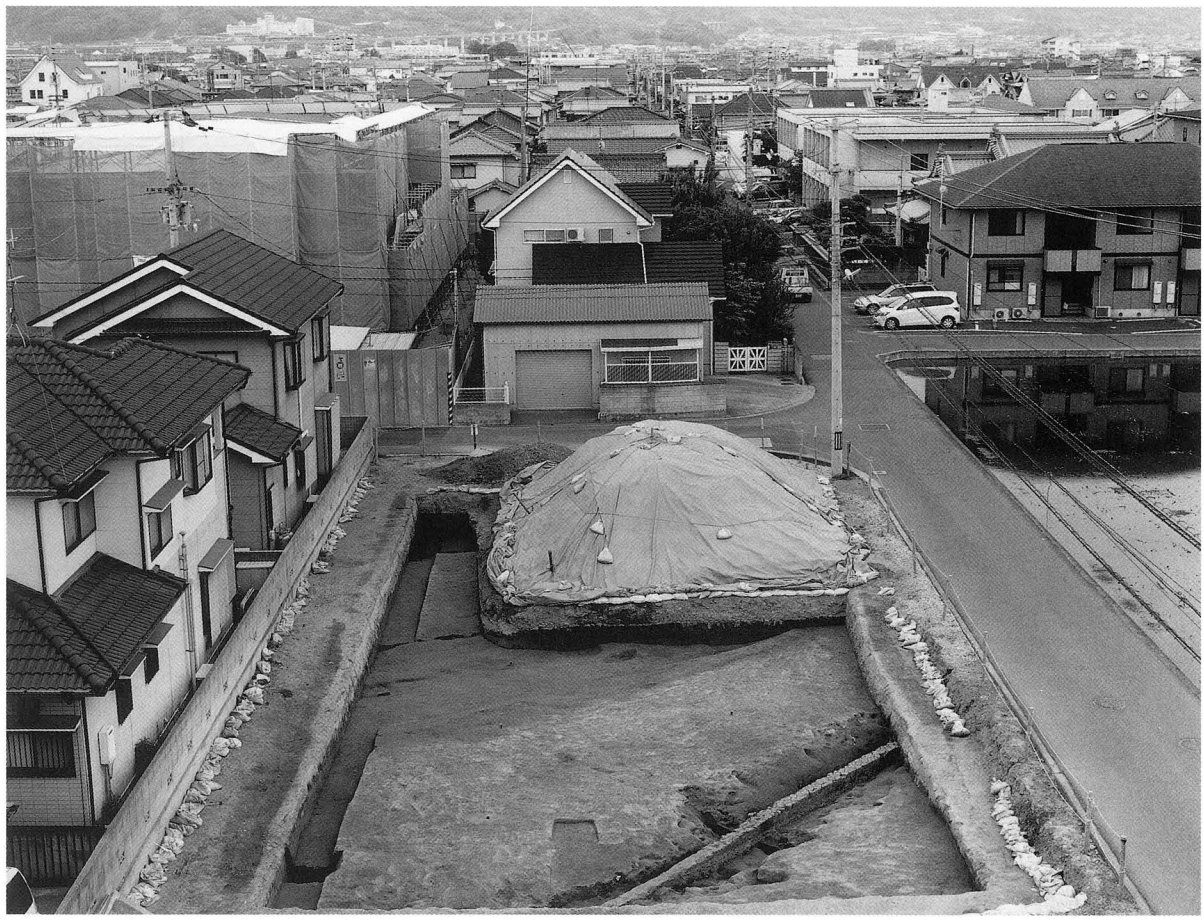


2．SD2 完掘状況（北東より）

1．SD４内遺物出土状況（北西より）

2．SD４内遺物出土状況（北より）

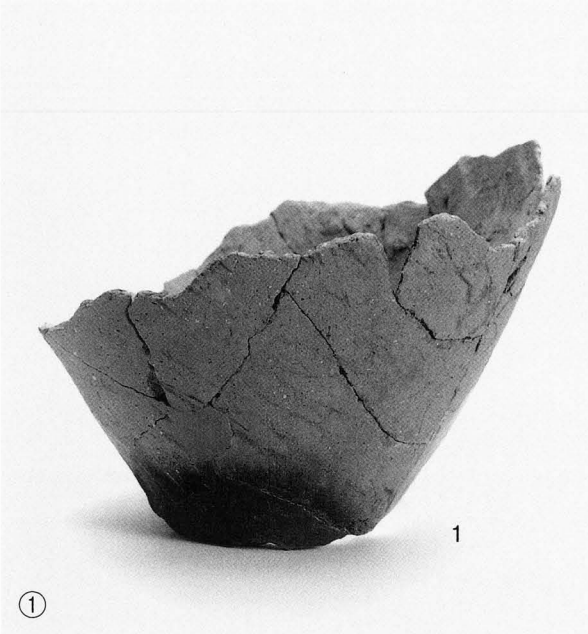
1．SD４完掘状況（北西より）

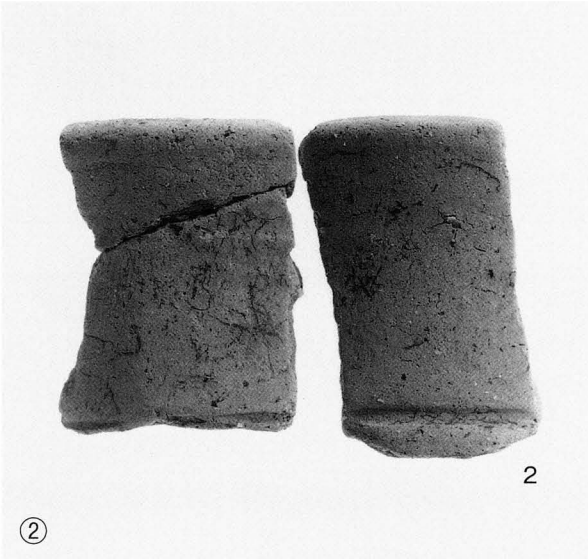


2．調査区北側完掘状況（北より）

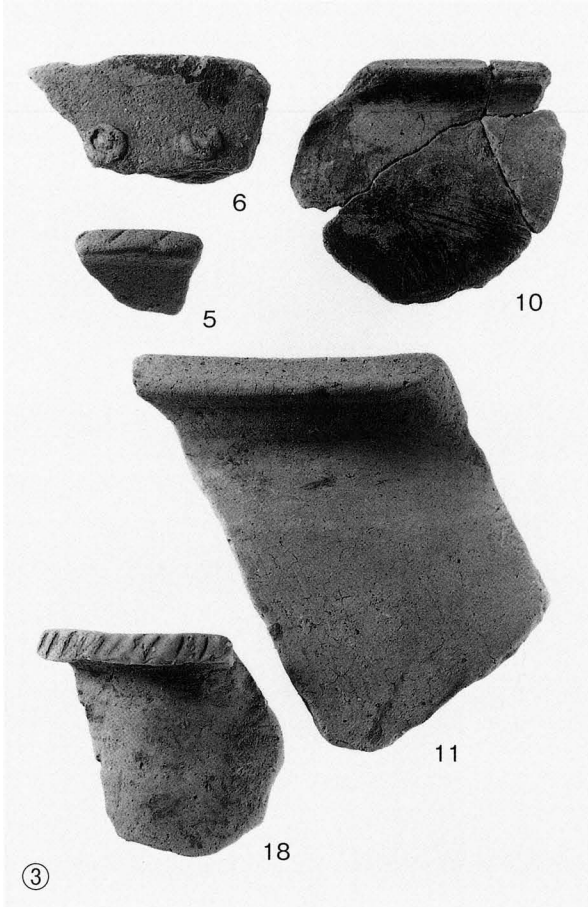
1．現地説明会風景（北より）

2．現在の状況（南西より）

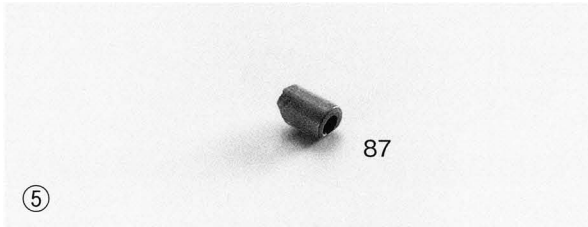


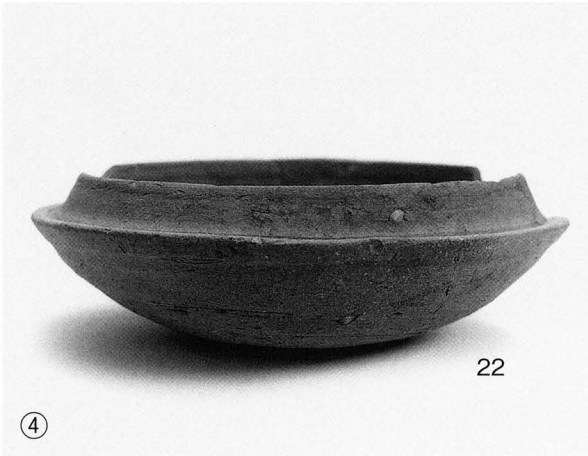


①・② SR１出土遺物

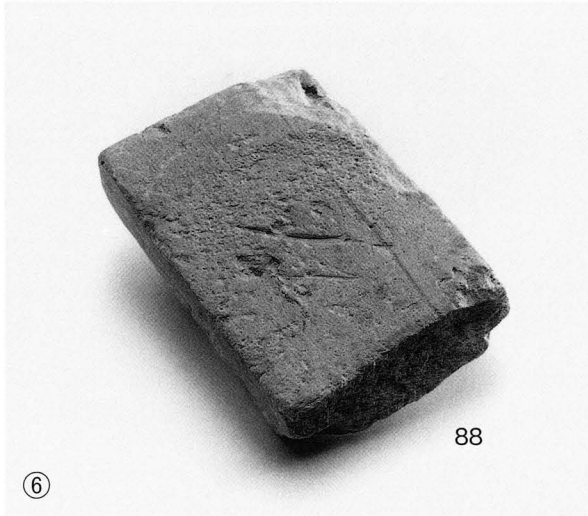


③ SD２出土遺物





④ SD４出土遺物



⑤・⑥ 客土内採集遺物

遺構内出土（客土内採集）遺物

客土内採集遺物

報告書抄録

ふりがな	ふるかわいせき
書名	古川遺跡　－４次調査－
副書名	松山市保健センター南部分室・松山市南部児童センター整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第146号
編著者名	武正良浩・大西朋子
編集機関	財団法人　松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
所在地	〒791-8032　愛媛県松山市南斎院町乙67-6　TEL 089-923-6363
発行年月日	西暦2010年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
ふるかわいせき 古川遺跡 じちょうさ ４次調査	えひめけんまつやまし 愛媛県松山市	３８２０１		33° 81′ 13″	132° 76′ 45″	20090302 ～ 20090531	594.925㎡	公共施設 整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古川遺跡	散布地	弥生	溝	弥生土器	
４次調査	生産地	古墳	溝	須恵器	

要約	調査の結果、弥生時代後期と古墳時代後期の溝、および弥生時代の自然流路を検出した。近接する遺跡においても溝・河川跡や淀み或いは池の可能性が考えられる土壌や護岸に使用された可能性のある木杭が見つかっていることから、本調査地は集落域ではなく、生産域に近い様相を呈しているものと考えられる。

松山市文化財調査報告書　第146集

松山市保健センター南部分室・松山市南部児童センター整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

古　川　遺　跡　—4次調査—

2010(平成22)年3月31日　発行

編集・発行　松山市教育委員会
〒790-0003　愛媛県松山市三番町6丁目6-1
TEL (089) 948－6605

財団法人 松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032　愛媛県松山市南斎院町乙67-6
TEL (089) 923－6363

印刷　株式会社明朗社
〒791-2112　愛媛県伊予郡砥部町重光150番地1
TEL (089) 958－6868